
放浪のプリンス

入川出水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放浪のプリンス

【Nコード】

N9067Q

【作者名】

入川出水

【あらすじ】

帝国の第二皇子として生まれたクレミーは、なぜか皇家直系の証である銀髪碧眼ではなく黒髪黒眼の子だった。時は流れて、十八歳の春。クレミーはふとしたきっかけから生家である皇城を捨て、あてもない旅に出ることを決心する。どこか頼りない皇子がゆく剣と魔術の放浪ファンタジー。

act - 01 黒き皇子

「陛下、これは一体……」

「黒い……禍々しいほどに」

皇城の一角にある皇妃の私室で産声が上がった。中央セントラルバニア帝国第二皇子の誕生の瞬間だった。新たな命を祝福すべきこの時に、しかしお産に立ち会った重臣達は一様に息を飲んだ。その原因は生まれたばかりの赤ん坊の容姿にあった。

薄っすらと生えた頭髮と、穢れを知らぬその両眼は、まさしく闇を象徴するかのような漆黒色。皇家直系の証であるはずの銀髪碧眼には似ても似つかなかった。瞬時にそれを察知した重臣達が落ち着きなく騒ぎ立て始める。

「あり得ぬぞ。黒の血統などどこにもないはずだ」

「もしか、種違いでは」

「貴様、なんと無礼なことを！」

「しかし、それ以外に説明できまい」

「だが、皇妃様に限ってそんなことは」

それらに耳を傾けながら、第七代皇帝グスタフ・ドイルは押し殺すような表情でしばし口を閉ざしていた。どれほどの時間が過ぎただろうか。一同の注目が集まる中、黙りこくっていたグスタフが苦々しげに言葉を吐き出す。

「この赤子は余の子ではない」

「陛下……？」

「忌々しい。まるで悪魔の子のようではないか」

グスタフは不快感に顔を歪めると、それきり寝室を出て行ってしまった。残された重臣達はどうしようもなく立ち尽くし、後には赤子の求めるような泣き声だけが響いた。

はたして求めていたのは正統な皇子という地位か、それとも親子としての自然な愛情か。

十八歳になった今では、当時の胸中など分かるはずもなかった。

*

クレミーは目を覚ました。どうやら夢を見ていたようだ。

天蓋付きの寝台で休む皇妃マージョリーの横に座りながら、クレミーはあるはずのない出生の記憶を手繰り寄せた。

十八年前のあの日、ここでこの世に生を受けたのだ。そして名前を、帝都に伝わる神話に登場する破壊と災厄をもたらす黒い竜『クレミー』からとって付けられた。髪と眼の色が黒いというだけの理由でだ。本来ならば人の子に付けるような名前ではないだろう。その子に対して、少なからず愛情を抱いていたとすれば。

「……クレミー？」

ならば父は自分に対して愛を感じていなかったということだろうか。生まれてこの方、一度たりとも父に優しく接してもらったことはなかったが、それでも肉親である父を恨んだことはなかった。当たりが厳しいのも皇子としての気質を養わせるための措置であって、つまりは遠回しの愛であると信じていた。

だが、それももう限界だろう。

「クレミー、聞いているの？」

なにせ今年で成人を迎えるのだ。いつぱしの大人になる。いつまでも子供じみた願望を握り締めていても、父は応えてはくれないのだ。

すなわち父は自分を愛してなどいない。いや実の息子とすらも思っていないのかもしれない。そう考えれば、父の生来の、他人行儀さえ逸脱した明らかな嫌悪を含む冷たい振る舞いにも納得がいく。

「クレミー！」

自分の名を呼ぶ声にクレミーははっと顔を上げた。

「申し訳ありません、母上。少し考え事をしておりました」

マージヨリーは上半身だけ起き上がる。

「母上！ お体の方は」

「大丈夫よ」

言葉を途中で遮り、真っ直ぐにクレミーの目を覗き込む。マージヨリーの青い瞳に黒が重なる。

「グスタフのことね？」

いきなり核心を突かれてクレミーは戸惑ってしまう。

「……はい、その通りです。どうして分かったのですか？」

「私はあなたの母よ。あなたの考えていることくらい分かるわ」

だから、それがなぜかを聞いているのに。クレミーはいささか腑に落ちなかったが、食い下がっても仕方がないので話を続けることにした。

「僕 いえ、私は、」

「そんなに堅くならなくてもいいのよ。私達は血の繋がった家族なのだから。肩の力を抜いて」

「はい、母上。このようなことをお聞きするのはこの上なく背理だと心得ているのですが」

「いいわ。なんでも話してみなさい」

「僕は……父上に愛されていないのでしょうか」

ああ、ついに言ってしまった。今まで常に傍らに用意していながらも、意識的に考えることを避けてきた疑問。その答えを知りたくて知りたくて仕方がない反面、いざ知ってしまった時の自分を想像して臆病になっていた。口に出さなければ差し当たり現在の父との関係は保たれるが、それでは不安が募る一方だ。だからといって、言えばどうなるというわけでもない。

結局、答えを知りたいだけなのだ。だが、その答えは既に心のどこかで出ているような気もした。

僕はどんな返事を期待しているのだろう。クレミーには自分自身がわからなかった。

「『愛されていないのでしょうか』と聞くということは、少なくともあなたは愛されていないと感じているのね」

「いえ、それは」

「遠慮することないわ。ここにはあの人はいないもの」

母上には敵わないな。クレミーはすべてを吐露することに決めた。

「……生まれてこの方、父の愛を感じたことは一度もありません。それどころか、はつきりと憎しみや疎みの念が伝わってきます。そしてその原因が、この、」

クレミーが右手を上げて前髪に触れる。

「この、不気味なまでに黒い髪と瞳にあるのも理解しているつもりです」

そこまで言い終えると、マージョリーの反応を待った。

大方は予想通りだったのか、マージョリーは落ち着いた様子でクレミーの言葉を受け止めていた。しばらく俯いて逡巡した後、覚悟を決めたように顔を上げると、包み込むようにしてクレミーの両手を握った。

「よく聞きなさい、クレミー」

マージョリーのただ事ではない声色にクレミーは慌てて居住まいを正した。

「あなたは正真正銘、私とグスタフとの間に生まれた子よ。信じるか信じないかはあなたの自由だけれど、これだけは言わせてちょうだい。私はあなたを愛している」

クレミーは目を見開いた。胸の奥に温かみが広がっていく。それが喜びだと気が付いたのは、ずいぶんと時間が経ってからだった。

「父上は……父上はどう想っているのでしょうか」

マージョリーは悲しげに首を横に振った。

「きつとあなたを愛していないわ。でも、それはあの人があなたを自分の息子と認めていないからなの。私がどんなに説明しても、あ

の人は信じてくれないまま。だから、それを分かって」

「そう、ですか」

沈黙が訪れる。

クレミーには分かっていた。あれだけ自分を邪険に扱う父に愛されているはずがなかったのだ。それでも、そのことを口に出すのを躊躇わせた理由は、むしろその先にあった。

「母上。母上のおかげで、ようやく決心ができました」

「そう」

につこりと心底嬉しそうに微笑むマージョリーに対して、クレミーは椅子から立ち上がった気が付けをした。

「僕はこの城を出て旅立ちます」

「その意味、分かって言っているのね」

無論、重々承知している。城を出るとは城を捨てること、つまりは皇家を捨てることになる。家柄も地位も何もかもをかなぐり捨てて、その身ひとつで外の世界へと出発するということだ。

クレミーは力強く頷くと、石造りの天井を見上げた。

「『黒竜は全てを破壊し、人々に災厄をもたらした』。一般的にはこの句で神話が締めくくられていますが、幼少の頃の僕はそれがどうしても気に入らなくて、必死で国立図書館の蔵書を漁ったんです。そうしたら、なんとこの話を創った作者の手記が見つかったのです。そこにはこう書かれていました」

クレミーはマージョリーに視線を下ろすと、一字一句間違えないようにゆつくりと諳^{そら}んじる。

「『……黒竜は確かに世界を滅ぼした。ただし、それは飽くまであの醜く荒れ果てた世界を無に還す役目を果たしたに過ぎない。人々はやがて根強く世界を建て直すことだろう。黒竜は破壊と災厄の象徴ではない。再建と調和の神である』」

真面目くさって言い終えると、急に恥ずかしさが込み上げてきてクレミーは照れ隠しに笑った。

「だから僕はあの黒竜のように、世界が間違った方向に進んでいな

いかどうかを実際にこの目で見てきたいのです。それこそが、この髪と眼と名を授かった僕の使命だと思っています」

緩んでいた顔を引き締め、真摯な瞳でマージョリーを見つめる。止められるかもしれない。あんな神話を信じるなど馬鹿げていると一蹴されるかもしれない。だが、止められた方がいい。いくら母の言葉であろうと、一度決めたことを断念するつもりは毛頭ない。

どんな非難でも受け止めるつもりで、胸を張って待つ。

マージョリーは「ふう」と小さく溜め息をつくと、諦めたように笑った。

「やっぱりあの人の子供ね。強情なところはそっくり。いいわ、あなたの好きなように生きなさい」

「母上……」

マージョリーの快い返答にクレミーは目頭が熱くなる。

「本当はここにずっと居て欲しいけれど、あの人を説得しきれなかった私にはあなたを止める権利はないわ。でもね、」

マージョリーは半ばベッドから這い出るようにしてクレミーの両肩を掴むと、縋るような表情で告げる。

「絶対に死んではだめよ。何が起きようと、決して。約束できる？」

「……約束します」

「それが分かっているなら、もう私から言うことはないわ。行っくらっしゃい。ちゃんとフレディには挨拶するのよ」

肩から手が離れる。不思議と身体が軽くなったような気がした。「もちろんです。では、行って参ります」

必要最低限の荷物をまとめて、旅装に着替える。上が袖無しの黒いインナーシャツに肘までの黒のロンググローブ、下が黒のレギンスと膝までのカーキのパンツという井出達だ。なるべく目立たないように地味なものを選んでいたら黒ばかりになってしまった。髪色と合ってちょうどいいかと思っただのは鏡の前で合わせてからだった。準備を終えたクレミーは二歳離れた兄であるフレディの部屋の扉をノックした。

「おう、どうぞ」

「失礼します、兄上」

フレディは入口に背を向けて机に座り、何やら分厚い書物に目を走らせていたが、訪問者がクレミーだと分かると笑顔で迎えた。

「どうした。お前の方から俺を訪ねて来るなんて珍しいじゃないか」
「実は、折り入ってお話がありまして」

そこでフレディは初めてクレミーの格好に目を向けた。

「どこかへ出かけるのか」

「はい。当分は帰らないつもりです」

「うーむ、そうか。……どうやら賭けはお袋の勝ちみたいだな」

「え？」

フレディはおもしろくなさそうに眉をしかめると、立ち上がった。ちよいちよいと手招きした。クレミーは訳が分からず近寄ると、フレディは無言で一番大きな引き出しを指差した。

開けてみるという意味だろうか。クレミーはおずおずと取っ手に手を掛けると、ゆっくりと引いた。中には、難解そうな啓蒙書や文献と一緒に小さな巾着が大切そうに納められていた。

フレディは横からひよいと巾着を摘み上げると、口を緩めて中身を机の上にあけた。入っていたのは銀の鎖に深青色の宝石が付いた綺麗な首飾りだった。

「これは？」

「ああ、皇家に伝わる由緒正しきネックレスだ。餞別として持っていけ。ついでに、この袋もやるよ」

フレディは首飾りが入っていた巾着をクレミーに手渡し、それから首飾りを掛けてやった。

「ところで兄上、賭けとはどういう……」

「なに、以前にお前について話したときにお袋が提案したのさ。『近々、クレミーが旅立つと思うから、その旅費を賭けないか』ってな。それで俺はお前が城に残る方へ、母さんは逆へ賭けた。んでもって俺の完敗だ。まったく……」

フレディは上着のポケットに手を突っ込むと、ごそごそと中を漁った。出てきたのは紙幣と硬貨が数枚ずつという見るからに頼りない額だ。

「悪い。今、金ねえわ……」

「いえ、お気になさらずに。この日のために色々と準備をして参りましたから、僕のほうでも多少は持ち合わせがございますので」

「はは、こりや参った。まあ、少ないけどこれはもらってくれよ」

クレミーの手の中の巾着に乱暴に貨幣を押し込む。

「ありがとうございます」

「……なあ、クレミー。親父のところへは行かないのか？」

少し言いにくそうにフレディが尋ねる。その質問を予想していたクレミーは、あらかじめ用意していた解答を口にする。

「この城の門をくぐった瞬間から僕にとって父上は父上でなくなります。ですから、挨拶するつもりもありませんし、名残惜しさも感じません」

「そ、そうか。ってことは、俺もお前の兄貴じゃなくなっちまうんだな。じゃあ、これからは『兄上』じゃなくて、『フレディ』と呼べ！ ほら、呼んでみ」

「フ、フレディ……さん」

「『さん』はいらん」

「フレディ上……」

「おかしいだろ！ ……まあいい。気張って行けよ、クレミー！」

「はい、フレディ！」

嬉しそうに声を張り上げたクレミーは颯爽と部屋を後にした。

「あーあ、行っちゃったか。俺が皇帝になった暁にはあいつを参謀に付けようと思ってたのになあ……」

窓の外、城門に向かって前庭を歩いていく愛弟の背中を眺めながら、フレディは未練たらたらに呟いた。

「『兄でなくなる』と言ったのがそんなに寂しいんですか？」
どこからか声が響いた。

次の瞬間、虚空に紫電が走り、瞬く間にそこに人間が立ち現れた。だばだばのローブに身を包んだ長身の男、魔術師アレンは伸びっぱなしの髪の間からフレディの様子を窺った。

「アレンか。なんというか、寂しいとかそんなんじゃないかな。こう、あるべきものが無くなっちまう感覚っていうのかな。とにかく落ち着かないんだよ」

フレディの拙い説明にアレンは呆れ返ったとでも言わんばかりに大きな溜め息をついた。

「あのですねえ。それを世間一般に『寂しい』と言うんですよ。もしかして知らなかったんですか？」

「やかましい！ お前はさっさと頼んどいたことをやってこい！」
「はいはい」

現れた時と同じように雷を纏ってアレンの姿が消える。

フレディは革椅子にどっかりと腰を下ろすと、窓越しに空を仰ぎ見た。春の抜けるような青空に、ぽつんと一つ雲が浮かんでいる。

まるで外の世界に放り出された弟のようだ。フレディは少しばかりクレミーが心配になった。

するとその雲に重なるように小さな影が現れた。アレンだ。

アレンはローブの中から複雑に捻じ曲がった木杖を取り出すと、天に向かって掲げた。それに応えるように先に付いた水晶に赤い光が灯もる。光の尾を牽くようにして杖を振り下ろすと、先端から大量に微細な光球が生まれた。光球はふわふわと空中を無秩序に漂っ

ている。

地上に行くクレミーが城門をくぐると、待っていたかのような頃合いで光球の一つが爆発した。それはちょうどクレミーの真上に当たる場所だった。

クレミーが頭上を見上げる。

おびただしい数の光球は続けざまに破碎し、次から次へと誘爆を引き起こす。小刻みに鳴り響く小気味良い破裂音は、さながら門出を見送る癪癪玉のようだった。

「アレンさん……どうしてここに？」

目を丸くしたクレミーがおそろおそろ尋ねる。それも当然だ。アレンは若くして魔術を極めた世界でも五本の指に入るといわれる実力者。セントラルバニアの英雄とも呼ばれ、帝国直属の魔術師団の先頭に立つ人物だ。そのような伝説級の偉人が、たとえ相手が皇子だとしても、クレミー程度のためにわざわざ時間を割くとも思えなかった。

「僕は頼まれただけです。どこかの寂しがり屋さんに、ね」

アレンがちらりと、一部始終を息を飲んで見守っているフレディの方を振り返った。反射的にフレディは窓枠から飛びのいて身を隠したが、クレミーの目はその姿を逃さなかった。

「兄さん……」

「ええ。素直に見送ればいいものを。寂しがりなだけじゃなく、きつと恥ずかしがりなんですわね」

「昔から素直にものを言えない人でしたから」

「ほっほう。それは興味深い話ですね」

二人が何事か談笑している。フレディは耳をそばだてたが、距離があるので内容までは聞き取れなかった。が、どうしてか自分の話題で盛り上がっているということだけは直感で分かった。

「そろそろ行きますね、アレンさん」

「はい。私もこんな戯れで引き止めて申し訳ありません」

と言いつつもアレンの顔に反省の色は見られない。

どこまでも掴めない人だ。クレミーは口元をゆるめ、静かにアレ
ンに背を向けた。

「次に会う時には、アレンさんに引けを取らないくらいの強さを身
に付けているつもりですから」

「おお、それは楽しみですな」

「それでは、さようなら！」

元気に別れを告げ、クレミーは一步を踏み出す。目の前には、終
わりが見えないほどに果てしなく長い下り階段が続いている。それ
が皇城が建つ高台と城下街とを繋ぐ唯一の交通手段である。そのわ
ずかな段差を一つ下るたびに、自分が皇子という身分から引きずり
下ろされるような錯覚を覚えた。だが、不思議と嫌な気持ちはしな
かった。

ずっと出たかったんだな。

いざ出発してみて気付いた。自分は初めからこうなることを望ん
でいたのだと。

生家である皇城を離れ、こうして外界へと歩を進めていくことが
とてつもなく心地よいのだ。閉塞も拘束も緊張もない、ひたすらに
自由な世界はこの上なくクレミーを惹きつける。

「ああ、世界はこんなにも」

広いんだ。

永遠に続くかと思われた直線階段を下り終え、城下街に着いた。正門へと延びる大通りをあてもなく歩いていると、クレミーの姿に気付いた通行人がわらわらと集まってくる。

「皇子様！ どうしたんだい、こんなところで。お父様に勘当されちゃったのかね」

「あらあら、お可哀想に。クレミー様には日頃からよくしていただいていますからね。もしお困りでしたら、遠慮なくうちへお泊まりなさってくださいな」

「おお、皇子さんじゃないか。どうだい、剣はいらないかい」

クレミーの見たことのある顔ぶればかりだ。というのも、日頃から城内で居心地悪く過ごしていたクレミーはしばしば城を抜け出し、城下街へと繰り出していたため、街の人間と懇意になっていたのだ。いずれも脱走の手助けをしてくれたのはマージョリーかフレディで、グスタフには知られていない秘密の一つだ。

「こんにちは、皆さん。僕、旅に出ることにしたんです」

クレミーの言葉に、衆人はあんどりと口を開けた。

「旅って……皇家はどうするのさ」

「捨てます」

カチンという擬音が聞こえてきそうな勢いで人々の表情が固まった。あまりにも反応がよすぎて、クレミーは内心笑いをこらえるのに必死だった。自分だけがクイズの答えを知っているような優越感が愉しかった。

「僕はもう皇子ではなくなりました。ですから、皆さんも年齢相応に接してくれて構いませんよ」

クレミーがにこりと笑うと、人々は翻訳者を求めるようにお互いの顔を見合わせた。唐突な告白に戸惑いを隠せていない様子だ。人だかりに気付いた人がさらに寄って来て、ざわざわと人々の囁き声

が溢れかえった。

このままここに居座るのもおもしろそうだが、それではいつまで経っても出発できそうにない。仕方なくクレミーは逃げを打つ。

「武器屋のおじさん。僕に剣を見せてもらえますか？」

クレミーの目の前にいた武器屋の店主はしばらく自分が呼ばれているとも気付かず呆けていたが、はっと我に返ると「お、おう」と慌てて店の方へと案内した。

観音式の扉をくぐると、金属特有の鉄臭さが鼻を刺激した。大通りに面する比較的大きな店舗だが、閑古鳥が鳴いている。

「このご時世、武器なんて必要とするのは冒険者くらいなもんでなあ」

クレミーの表情を読み取った店主が自嘲気味に笑った。クレミーは返す言葉が見つからず、逃げるように陳列棚を眺めた。短剣、長剣、曲剣、細剣、刺突剣、大剣、投げ短剣、槍、薙刀、戦斧、鎌、鉤爪、棍棒、鞭、杖……と国随一の武器屋ともあってその種類は豊富だ。

「うちは鍛冶屋じゃないからな。あんまりいいモンは揃っていないよ」

「ご心配なく。使う武器を選ぶほど、僕はまだ熟達していませんから」

「ははは、そうかい。……それにしても、さっきは冗談で剣をいらないかと聞いたが、」

店主は顎の無精髭を弄りながら、意外そうな顔で切り出す。

「剣術なんて、一体どこで習ったんだい？」

「今は亡き祖父に習いました」

「なんと、あの偉大なる武帝デミトリアス・ドイル様から直々にか！　こりゃたまげたもんだ！」

店主は目を見開いた。

デミトリアスは現役時代、つまりかつてセントラルバニアが西の大国ウエスタノーレと戦乱の状態にあった時分に、自ら先陣を切っ

て戦場を駆け回った武帝だ。じきに休戦協定が結ばれ、現在はお互いに牽制し合う緊迫した関係を保っているが、それでも束の間の平和を切り拓いたのはまぎれもなくデミトリアスの手腕であった。そのあたりの史話をよく知っている世代の店主にとっては、デミトリアスは尊崇の対象であるのだろう。

クレミーは幼少の頃に世話になった祖父の、柔らかな笑顔とたくましい二の腕を思い出しながら、誇らしげに口元を緩めた。

「ええと。じゃあ、これをお願いします」

「あいよ。ん？ そんなに細いのでいいのかい」

クレミーが指差していたのはウォーキングソードと呼ばれる刃渡り六〇センチほどの軽量細身の片手剣だった。レイピアを小さくしたような外見で、質素な楕円形の^{ガード}鍔と申し訳程度に付けられた^{ナックルガード}護拳はいかにも量産品といったふうだ。貴族の装飾具としても用いられる剣だが、この店の品は実用を目的としているらしく柄に装飾は見られない。

訝るような視線に、クレミーはこくりと頷いた。

「ええ。僕はそれほど力がありませんから」

店主はちらりとクレミーの腕を見た。決して太い方ではないが、鍛錬によって洗練されて引き締まった筋肉からはとても非力には見えない。単に軽い剣を好むのか、それがデミトリアス流なのかは判然としないが、どちらにしろ客の注文には従わなければならないので、渋々在庫から新品を取り出した。

「はいよ、皇子さん。ウォーキングソード一本で八〇〇〇ビル。剣帯はおまけだ」

「もう皇子じゃないですってば」

クレミーは鞘に納められた剣と代金を引き換える。

フレディから受け取った資金にはまだ手をつけないでおいだ。これは本当に困ったときに使うつもりだ。

「これから防具を見に行くのかい？」

「えっと、防具まで買つとお金が無くなってしまうので、しばらく

は買わないつもりです」

「ふーむ、それは頼りないな。おお、そうだ。実は俺にはあんたくらいの年の馬鹿息子がいてな。そいつはある日突然、『俺は冒険者になるんだ』つつて家を出て行っちゃったんだが……。まあ、それで、そんな時に置いていった軽鎧があるんだ。これが勝手に売るところもできなくて困っていたところだな。もう随分と長い間帰ってきていないし、あんたさえよければもらってくれないか？ 体格も大して変わらないようだし」

「本当ですか！？ ぜひいただきたいです！」

クレミーがぱつと顔を輝かせると、店主は我が子を懐かしむように優しく目を細め、店の奥から木箱を運んできた。

クレミーは木箱に入っていた胸、肘、膝当てを身に付け、左手首に小型のバックラーを装着すると、剣帯の左に鞘を吊るした。さらに荷物の中からくるぶしほどまである漆黒のロングマントを取り出して羽織り、フードを被って前ボタンを閉める。

「これで立派な冒険者だな。にしても、顔まで隠す必要があるのかい」

「この街では僕は目立ちすぎるようなので、こうしないと色々面倒なんですよ」

ああ、と店主は先程のちょっとした騒動を思い出して合点がいった。

「このことを知らない奴らには、俺から伝えといてやるよ」

「助かります。では！」

クレミーは店主に頭を下げると、観音扉を開けて外に出た。午後
の突き刺すような日差しの中では、全身を覆うほどの真っ黒いマントは少しばかり暑苦しかった。

セントラルバニアの街は広い。皇城が南向きに建っているので南門が正門にあたるのだが、皇城前の階段下からその正門に向かって大通りを直進しても徒歩で約十五分は掛かるほどだ。クレミーは故郷の街並みを見納めるようにして歩き、やっとこさ正門に辿り着いた。関所の役人に何か咎められるかとも思ったが、案外引き止められることはなかった。

門を抜けて魔物避けの柵までやって来ると、クレミーは脱ぎ捨てるようにしてマントを外した。正直、暑くて敵わない。さらに、ここからは魔物の襲撃も考えられる。剣を抜きにくい格好は極力避けるべきだろう。

クレミーはマントを畳んでリュックに詰めた。そこでフレディにもらった巾着の存在を思い出し、剣帯の鞘とは反対側に提げた。歩くたびに中で鳴る硬貨どうしがぶつかり合う音が楽しい。

「まずはサウサニーを目指そう」

南国のサウサニーは年中高温多湿の熱帯であることで有名だ。季候を利用した果樹栽培が盛んで、セントラルバニアの市場に並んでいる果物もほとんどがサウサニー産である。さらに大陸の端ということもあって海に面しており、ビーチ目的の観光客でも賑わっているという。

クレミーはあれこれ想像を膨らませながら、小麦畑に挟まれた街道を歩いていく。馬術を嗜んでいるので移動手段に馬を使うことも考えたが、購入費も維持費もばかにならないため即座に却下された。見渡す限りでは魔物の姿はない。大陸中央部の魔物は他の地域に比べて弱く、集団性も低い。決して油断はならないが、めったに街道には現れることはないのですこまで気張る必要もない。それを教えてくれたのは祖父だった。

今思えば、どうして祖父は自分にそのようなことを覚えさせてい

たのか。剣の稽古の合間の雑談にしてはかけ離れている気がするし、皇子にとつての将来に役立つような話でもない。まるでクレミーが城を出ることを知っていたかのようなのだ。

まさかと思う反面、あの奇想天外な祖父ならあり得るとも確信していた。それほど捉えどころのない人物だった。人間性だけならアレンに似ているかもしれない。

数十分ほど歩いただろうか。分かれ道に出くわしてしまった。右か左かの二択だ。地図等は用意してきていないので、どちらがサウサニーに向かう道なのかは判らない。だからといって、街道を外れて真っ直ぐなんていうのは論外だ。

だが、幸いにも分岐点には立て札が立っていた。ミミズが這ったような乱雑な字で、板に直接文字が書かれている。

『みぎ……まもの。ひだり……あんぜん』

「これ、誰が書いたんだろう」

とても大人の字とは思えなかった。少なくともセントラルバニアの役人はここまで煩雑な仕事はしない。ここは既に隣町の管轄なのだろうか。

「でも、左に行くしかないか」

魔物がいるといわれてそちらに向かうほどひねくれてはいないし、自信過剰でもない。こと魔物に関しては図鑑上の知識しか持ち合わせていないクレミーにとつては、いくらこの辺りの魔物が貧弱とはいえ脅威であることには変わりはないのだ。デミトリアスに習った剣術だつて使っていたのは模擬剣で、しかも相手は人間だ。魔物にも通じるとは限らない。

右の道はこれまでと同じ穏やかな平原、左には青々しい森林が生い茂っている。森の中は薄暗く、道も狭いが、魔物に出遭うよりはずっとましだ。

むしろ涼むのにはちょうどいいなとクレミーは意気揚々と左の森へ入って行った。入口の木にぶら下がっていた『本物』の看板が裏返されていたのにも気付かずに。本来ならば、そこにはこう書

かれていたのが見て取れたことだろう。

『コノ先、エルフノ森。人間八立チ入ルベカラズ』

何も知らないクレミーは鼻歌混じりに森の奥へと歩を進めていく。その様子を薄闇から覗く目が六つ。機会を窺うようにひっそりと森と同化していた。

まだらに降り注ぐ春の木漏れ日が地面に網目模様を映し出す。新緑の生い茂った森の空気は濾過したように澄んでいた。それらを肺いっぱい吸ってみると、身体の内側から浄化されるようだった。

クレミーは消えかけた街道を陽気に辿っていく。樹木を切り倒して作られた人工の小道はよほど整備が行き届いていないのか、進むにつれて徐々に大自然に飲み込まれつつあった。

それにしても、思った以上に森は長い。旅立ちの準備を手伝ってくれた侍女に聞いたところ、一、二時間も歩けば隣町に着くと言っていたのだが、もうかれこれ出発してから三時間は経っている。外を歩き慣れていないという理由だけでは説明できない遅延だ。

そろそろ日が傾き始めている。

幸いにも今のところ魔物との遭遇はなく、またこんなにも穏やかな自然の中に凶悪な魔物が棲んでいるとも思えなかった。すっかり緊張感をなくしてしまったクレミーは終いには目を閉じて、時折聴こえてくる鶯の歌声に耳を傾けながら、安らぎに身を任せた。

しばらく足を運ぶと、進路上に大きな倒木を発見した。街道を断つように横倒しになっているその高さはクレミーの身長を超えている。どうやらかなりの巨木のようなのだ。

クレミーは眼前に『そびえ立つ』大木を見上げて、自分が小人に変身してしまったかのような感覚に陥った。倒れている木に『立つ』という表現を使うというのも妙だが、それほどまでにスケールが大きいのだ。

クレミーは倒木を避けようと左右に回り道を求めたが、ここからでは折れ目も頂上も木々に隠れて確認できない。どこまであるかも分からない大木を当てにして、草木が鬱蒼とする深い林の中を掻き分けながら迂回するのは得策とは思えなかった。

悩んだ挙げ句、結局、目の前の巨木を乗り越えて行くことに決め

た。クレミーは片肩に提げていた荷物を先に幹に上げると、木の端に手を掛けた。

「あれ」

いざ登ろうとして気が付いたのだが、樹皮の表面に足場にするための取っ掛けがいくつか彫り込まれている。おそらくこの道を頻繁に行き来する冒険者が商人かが作ったものと見てまず間違いないだろう。

ありがとうございますと心の中で謝辞を述べながら、クレミーは腕に力を込めて身体を浮き上がらせた。そのまま取っ掛けを利用して一気に登ろうと頭上を振り仰いだその時、空を切り取る太い枝の上に、手に『何か』を持った小さな影を認めた。

「やあああっ！」

その瞬間、影は枝から飛び降りてその『何か』を思い切り振り下ろした。落下の勢いに合わせて落とされたそれは頑丈な木の棒の先に鋭利な石をくくりつけて作ったハンドアックスだった。

先に動いたクレミーは即座に倒木から手を離して間一髪その攻撃を避けた。石斧がクレミーの登ろうとしていた樹面をえぐる。

「くそお、ニンゲンめ！」

奇襲の失敗を悔しがる声に、何者だとクレミーが幹の上を睨みつけると、攻撃を掛けてきたのはまだ年端もいかぬ少年だった。ただし、その耳は人間のそれよりも長く、尖っている。

「……エルフ!?」

「今だ! おまえたち、やれえ!」

エルフの少年が叫ぶと、クレミーの両脇の草むらからもう二人仲間らしき少年が飛び出してきた。どちらも同じく石斧を持ってクレミーに襲い掛かる。

「おっと!」

クレミーは右側から横薙ぎに振られた石斧を数歩距離を取って躲かわすと、間髪入れず左側から飛び掛ってきた少年の振り上げた手を掴む。さらに少年の手から斧を払い落とすと、背中側に回り込んで少

年の右手を後ろ手に締め上げ、左手を少年自身の首筋に回して押さえつけた。

「いてえ！ 離せよ！」

「動かないでください！」

クレミーが声を張り上げると、三人の少年はぎくりと動きを止めた。

「……あなたがどうして僕を襲ったのかは知りませんが、自分を殺そうとしている相手に情けを掛けるほど僕はお人好しではありません。それでもまだ向かってくるのなら容赦はしません」

剣帯に吊るした長剣が音を立てる。ウォーキングソード捕らえられた少年がびくりと全身を震わせた。

クレミーが他の二人の方に鋭い眼差しを向けると、彼らははっとして構えていた石斧を電気でも走ったみたいに慌てて地面に放り投げた。

ふう、と安心したクレミーはあらためて目の前の少年を見た。エルフの寿命は人間の何倍もあると聞いたことがあるので実際には判らないが、外見だけでいえば人間の十歳ほどだろうか。その吸い込まれるような瞳には一点の穢れも見出せなかった。

何か事情があるのかもしれない。

「大丈夫。戦う気がないのならあなた達を傷つけたりはしませんよ。ただ、このまま見過ごすのは襲われた僕の気が済みませんから、何か訳があるなら話してもらえませんか」

クレミーが優しく諭すと、地上にいる少年は半べそになりながらこくこくと首を縦に振り、取り押さえられている少年は目を伏せて黙りこくった。しかし、初めに襲ってきた少年だけは木の上から気丈にもクレミーを睨み付け、それから勝ち誇ったように笑った。

「おいニンゲン。これ、なーんだ」

少年は見せ付けるように手に持ったリュックを揺らした。それは先に幹の上に乘せておいたクレミーの手荷物だった。もちろん中には携帯食料や現金が入っている。

「あ、ちょっと、その鞆は」

「えいつ！」

「うぐつ！」

一瞬拘束の力を緩めた隙に、押さえていた少年が離れてクレミーの鳩尾に肘打ちを喰らわせた。完全に不意を衝かれたクレミーは痛みで片膝をつく。

「ずらかるぞ！」

鞆を持ったリーダーらしき少年の合図で三人は森の奥へと駆け出した。あの巨大な倒木をまるで跳び箱でも跳ぶように軽々と飛び越え、たちまち森の茂みの中へと姿を消してしまった。

「うっ……」

腹部の鈍痛と、年少者にしてやられた情けなさでクレミーはしばらく立ち上がることができなかった。子供だと思って寛容な態度で接した結果がこれだ。無様この上ない。

でも、どうしてこんなところにエルフがいるんだろう。

ふと不思議に思ったその時、クレミーがやって来た街道を同じように辿ってくる者がいた。ちらりと目を向けると、どうやら若い女のようなだった。年齢はクレミーと同じかそれ以下か。もっとも、何よりも気になったのは彼女もまたエルフ族であるという点なのだが、狩りの帰りだろうか。動きを阻害しないために露出の多い格好をしたエルフの少女は背中に大きな弓を携え、肩には討ち取った魔物を担いでいる。毛皮と食料に使うモリギツネだ。

クレミーはおもむろに立ち上がって剣の柄に手を掛ける。相手は弓手で、しかもまだ武器を構えてはいない。もう先程のようなへまはしないつもりだ。

先手必勝、やられる前にやれ！

「うおおおおお！」

剣を抜いたクレミーが雄叫びを上げながら突進する。すると少女はびっくりしたように獲物を取り落とし、あたふたと左右を見回すと、泡を食って逃げ出した。

拍子抜けして立ち止ったクレミーを置いて、少女は目にも留まらぬ速さで来た道を引き返して行く。と思ったら突然かくんと横に折れ、近くの適当な樹木の後ろに身を隠した。そのままそつと顔だけ覗かせてクレミーを窺う。

二人の間に沈黙が流れる。

「あの……」

気まずさに耐え切れなくなったクレミーが先に声を漏らした。神経質になっている少女はその呟きにすら敏感に反応し、びくんと小さく跳ね上がると、一本後ろの木へと移った。そしてまた顔を覗かせる。

すっかり戦意を削がれたクレミーは剣を仕舞い、剣帯から鞘を外して地面に置いた。加えて両手を上げて害意がないことを示すと、不器用に少女に向かって笑いかけた。

少女はそこで初めて安心したように息をつき、落とした獲物を拾いに戻ってきた。至近距離で見る彼女の思った以上に整った顔立ちや、エルフ特有の色鮮やかな翠色の長髪にクレミーはどぎまぎさせられた。

「あの、どうしてこの森の中に……？」

少女は若干の怯えを含む細々とした声でクレミーに恐る恐る尋ねた。

その質問に答えようと口を開いた時、クレミーはある問題に直面した。目の前の少女に対してどのように接するべきかという問題だ。皇城内では、身内相手にも敬語で話していたが、それに息苦しさを感じていなかったかと聞かれれば、答えはおそらく『ノー』になる。ところが、既に皇子という身分を捨てたというのならば、そのような丁寧な口調からも離れるべきではないだろうか。

それに何より、もし口調で皇子だとバレたら大変だ。

「ええと、」

クレミーが語頭を漏らすと、少女は獲物を担ぎ上げるために屈んだ姿勢のままクレミーを見上げた。上目遣いのその瞳にはまだわず

かに恐怖が滲んでいる。

「森に入る前の分かれ道に立て札があっただけで、そこにこつちの道の方が安全って書いてあったから、かな」

クレミーが慣れない口調に苦労しながら説明すると、少女はぽかんと首を傾げた。

「安全……ですか？ たしか、あそこの立て札にはこちらの森には立ち入らないように書いてあったはずなのですが。それに、森の入口にも同じようなことが書かれた看板があったと思いますし」

「ええ、そんな……」

クレミーは記憶を辿った。あの幼児が書いたような稚拙な字は忘れようにも忘れられない。今思えば、そのいかにも怪しい立て札をもっと疑うべきだったのかもしれない。

「あっ」

「どうかしましたか？」

「もしかしてさっきの子供達が……」

「こども？」

かくんと首を傾げる少女に、先程の事件について話す。いきなり襲われたこと、犯人はエルフ族の少年達だったこと、荷物を盗られたことなどをだ。

「ああ……あの子達はまたなんということを……」

少女は頭が痛いといったふうに額に手を当て、それからぱっと気付いたようにクレミーの方を見ると、急いで頭を下げた。

「ごめんなさい！ 村の子供達が大変なことを！ それもそうですよね、警戒されても仕方ないです。……本当にごめんなさい」

「いや、謝るのは僕の方だよ。どんな理由があろうと、君に剣を向けてしまった。許してほしい」

お互いに非を認め合って、ひとまずその話は終わりにした。

「そうだ、村って？」

「この森の奥地にあるエルフの村です。そこではわたしを含め少数のエルフの民が暮らしております」

ということとは、さっきの少年達は村に帰ったということだろうか。クレミーは倒木の向こうへ目を向ける。

「あ、申し遅れました。わたしはシャロンという者です。知っていますか？ エルフは一族全体が一つの家族とされているので姓がないのですよ。……えっと、お名前を伺っても？」

「あ、うん。僕はクレミー・ド」

ドイルと名乗ろうとして言い留まった。確かに皇家は捨てたが、姓をどうするかまでは考えが及んでいなかった。とはいえここでドイルを名乗るのも面倒なことになりそうなので、急遽、母方の旧姓を拝借することにした。

「ミルフォード。よろしくね、シャロン」

クレミーはごまかしのつもりでぎこちなく笑った。

シャロンは特に疑う素振りもなく、「クレミーさんですか。そういえば、帝国の皇子様もそんな名前だった気がします」と先程までの怯えが嘘のように笑顔で手を差し出した。クレミーは彼女の何気ない一言に内心ひやひやさせられながらも、表向きには快く握手に応じた。これから名乗るたびにこのような複雑な思いが影を落とすのだろうかと思うと、いささか気が重くなった。

「ところで、人間がその村に行くのはまずいのかな。えっと、ほら、盗られた荷物のこともあるし」

「いえ、人間を好んでいないのは一部のエルフのみなのです。本当は、種族の違いとか寿命の違いとか関係なしに一緒に暮らせたらいいですけど……。って、そうじゃなくて！ 私の知り合いだと言え、村の人達もわかってくれると思います、たぶん、おそらくもしかしたら……」

尻すぼみになるシャロンの言葉。だがそれでもクレミーを安心させるには十分だった。このまま荷物を見限って来た道を引き返すことになるだろうと半ば諦観していたため、その安堵感もひとしおだ。もうすぐ日が落ちる。

夜行性の魔物は凶暴といわれる。できれば暗くなる前に村に着き

たいものだ。

「大丈夫ですつ。わたしが案内しますから」

シャロンはぐつと胸の前でガッツポーズを取ると、獲物を抱えて歩き出した。森の入口に向かって。

「そっち逆だけど」

「……はっ!？」

シャロンは慌ててくるりとUターンをすると、羞恥に頬を赤らめて逃げるように倒木を飛び越えた。獲物を担ぎながらもその動作は軽快だ。

「本当に大丈夫かな」

ずんずんと先を行くシャロンの背中を眺めながら、クレミーは先行きが心配でならなかった。

夕暮れのエルフの森には鳥の感傷的な鳴き声^{からす}がこだまし、西からの落陽が道なき道を歩く二人の身体を煌々と照らしていた。

*

「すごい……森の中にこんな広い空間があつたなんて……」

円状に森を切り拓いてつくった広大な芝生の広場には布張りの家屋が散在している。中心に置かれた銅像を囲むようにして同心円状に家々が建ち並び、布越しに漏れる家の明かりや、ゆらゆらと立ち昇る調理の湯気などからは村の営みが盛んに窺えた。帝都とはまた違ったあたたかさがそこには感じ取れた。

それがシャロンの暮らすエルフの村『ルンカ』の風景だ。

ルンカとは太古の昔にこの豊かな森を発見し、仲間と共に村を建てたエルフ族の先祖の名前で、現存するエルフの民は総じてルンカ

の血を引いていると伝えられている。中心にある銅像もそのルンカを模して彫られたものだ。

二人がエルフの村に着いたのは日没をとくに過ぎて、月がちょうど真上にのぼった頃だった。

「なんだか、思ったより時間が掛かりましたね」

「……そうだね」

シャロンの悪意のない感想に、クレミーは呆れを通り越して力無く答えた。

本来ならば、ここまで遅くなるはずはなかったのだ。倒木のあった地点、すなわちクレミーが危うく殺されかけたあの因縁の場所にいた時点で既に村は目前だった。

ところが、道中でシャロンが「近道があるんです」と得意満面に林の中を進んでいったせいで、もちろん方向音痴の彼女のことだから村に着くまでかなりの紆余曲折を経たのは言うまでもないが、それに加えて彼女が狩ったモリギツネの同胞達に追い回されたり、途中で「愛用の弓を落としてしまいました！」と来た道を随分と遡ったり、終いには完全に迷子と化したシャロンが泣きそうな顔でクレミーに縋ってきたりしたので、結局こんな時間になってしまった。今まで一人の時はどうやって村に帰っていたのだろうか。クレミーは隣にいる森生まれ森育ちの超天然娘の横顔を見やり、それから諦めたように嘆息した。

当の本人はここに行き着くまでの苦労はもう水に流してしまったようにうんと伸びをすると、クレミーを振り返って無邪気に笑った。「わたし、お腹ぺこぺこです。帰って早くご飯にしましょう!」

「あ、シャロン……」

言うが早いのか、シャロンは嬉々として一つの家に向かって駆けて行く。同心円の最も外側の家だ。クレミーは攫われた荷物のことがいささか気かりではあったが、シャロンのあの無垢な笑顔を見たら、些細な問題だと思った。

家の中から顔だけ出して「クレミーさん早く早く!」と手招きす

るシャロンに急かされてクレミーは布製の玄関をくぐった。丸太を組んだ足場に獣皮を敷いて布地を被せただけの簡素な造りの家の中は天井から吊るされたランタンの橙色の光で満たされており、どことなく幻想的だった。

「あの、クレミーさん。本当はこの村にも公衆浴場があるのですけれど、思いのほか帰りが遅くなってしまつて、その……」

「時間切れ？」

「そうですね。ごめんなさい……」

しゅんとするシャロンに、クレミーは手を振つて答える。

「いいよいいよ。別に一日お風呂に入らなかつたところで死ぬわけじゃないから。むしろ、シャロンは平気なの？」

「へっ？」

「だつて、女の子なのに」

察しが悪いシャロンにクレミーが付け加えると、彼女はそんなことかと合点がいった。

「いえいえ。森で生活している以上、こういうことには慣れてますから」

シャロンは得意げに胸を張つた。

それから二人は申し訳程度にタオルで身体を拭いた。もちろん別々の場所で。

「この灯りはどうやって点いているの？」

身体を拭き終えてお互いに顔を合わせると、クレミーは氣になつていた疑問を投げかけた。

ランプに明かりを灯したければ蠟燭かオイルやガスといった燃料が必須である。ところが目の前のランタンにはそれらしいものはなく、ただのガラス球にしか見えなかつた。

森の中なので電動はありえないだろうし、何よりこの部屋には放電石も電気配線も見当たらない。

シャロンは少し意外そうな顔でクレミーを見つめ、「魔術ですよ」と悪戯っぽく笑うと、ランタンに人差し指を向けた。すると、まる

でスイッチのオン・オフを切り替えるようにランタンの灯が明滅し始めた。

「すごい！」

「火の魔術の一種です。……こんなこともできますよ」

クレミーに褒められて上機嫌なシャロンは今度はランプに向けた手を開いた。そしてさっきよりも強く力を集中させたところ、ガラスの中の灯が突然ぼうつと燃え上がった。盛んに燃焼する炎は容器を焦がさんばかりにその勢いを増していき、やがて部屋の中が真昼のように明るくなった。

「ま、眩しい……！」

「あはははっ」

シャロンがかざしていた手を下ろすと、ランタンは元の火力を取り戻した。しかし灯が消えていないということはシャロンが魔術を使い続けている証拠だ。単純な術なら無意識的にも唱えられるということだろうか。

「それにしても、驚きました。クレミーさんは魔術をご存じないのですか？」

「知っているには知っているんだけど……」

アレンという偉大な魔術師の魔術を間近で見てきたのだから、とは言わない。

「僕は使えないから」

セントラルバニアには魔術という文化があまり浸透していない。他国には昔から、中央といえば剣、剣といえば中央といったイメージで通っているらしく、はるばる帝都にやって来る若き芽の多くは騎士団志望や武者修行目的であることが多かった。そして、その分魔術の発展は遅れることになる。結果、魔術を専門に教える学校もなければ、独自の研究機関もないといった非魔術志向の国が生まれてしまった。一応、知識や技術は書物という形で他国からの輸入しているものの、使い手の欠乏も相まって、実用レベルに達していないというのが現実だ。

「えっ、そうなのですか？ わたしはてつきり使えるのだと思ってました」

だって、とシャロンはクレミーの胸の辺りを指差した。クレミーはまさか自分まで燃やされてしまうのではないかと思ってどきりと心臓が跳ね上がった。

「こんなにも魔力に溢れている人、わたし見たことないですよ」「えっ？」

シャロンはちよつと首を傾げると、それから思いついたようにぽんと手を打った。

「そうだ！ わたしが魔術を教えてあげればいいんだ」

「え、本当に？」

「はい！ ……といつても、わたしも簡単なものしか使えないのですけれど」

シャロンは恥ずかしそうにぺろりと舌を出した。

「十分だよ。実は昔からけっこう懂れてたんだ」

「それは何よりです。では、何から教えましょ」

その時、シャロンの腹の虫が盛大な音を立てた。そこで初めて二人は夕食を食べていないことに気が付いた。

「わ、恥ずかしい……」

「まずはご飯だね。魔術は明日にでもお願いしようかな」

「はい……」

クレミーは顔を真っ赤にしたシャロンとともに、少し遅めの夕食の準備に取り掛かった。献立は本日シャロンが獲ってきたモリギツネの香り焼きと、村で採れる山菜のスープだ。

食事を終えた頃にはすっかり夜も更けてしまった。クレミーは食卓の椅子で早々に舟を漕いでいるシャロンを寢床に連れて行き、玄関先にあった水瓶で食器を洗った。最後にクレミーには消せないラントンの灯をシャロンに消すように囁きかけると、いくつか寝言を並べたのち、ふっと灯が消えた。

クレミーは思い出したように軽鎧を先程のタオルで拭いてから、

適当にその辺の床で横になった。

「やっぱり着替えは持つてくるべきだったな」

かさばるので諦めたが、やはり服を替えないとどこか心地が悪い。城の恵まれた生活が身体に染み込んでいるクレミーは実を言えば身体を流さないことにもかなりの抵抗があったのだが、シャロンの前ではそんなことは口に出るはずもなかった。

「僕はもう、皇子じゃないんだから……」

疲労から眠気はすぐにやって来た。

ろくに帝都を出たこともない皇子の放浪一日目は、これにて幕を閉じた。

人々の喧騒で目が覚めた。何やら近所で揉めているような声がする。

クレミーは徐々に覚醒する意識の中で、真っ先にそれを認識した。次に抱いたのは違和感。美しい小鳥のさえずりやひんやりと透き通った大気、背中に当たる柔らかな獣皮の床、色褪せた布張りの天井。それらは皇城で味わう『いつもの朝』の感覚とは打って変わって、新鮮な目覚めを提供してくれる。

「ああ」

そこでクレミーは自分がエルフの村を訪れていたことを思い出した。前日の、旅の初日にしては濃厚すぎる出来事の数々が蘇る。

「そうだ、シャロンは……」

狭い家の中を見回すが、その姿はどこにもない。

もう狩りに出かけてしまったのだろうか。昨晚、夕食の支度を手伝った時にはまだモリギツネの肉は残っていたように見えたとし、その他の野菜類も多く貯蔵されている。少なくとも、今朝の朝食に困ることがない程度には蓄えはある。

それにシャロンの性格上、黙って出て行くとも考えにくい。彼女とは会って間もないが、クレミーにもそれくらいは判った。

ならば、どこに。

「クレミーさんは悪い人じゃないですっ！」

矢庭に外から聞こえたきた怒声に、クレミーはついと戸口を振り返った。

それは確かにシャロンの声だった。あの温厚な彼女がこのように取り乱すなど、きつとただ事ではない。そこにクレミーの名前が拳がっているのも気になった。

『いえ、人間を好んでいないのは一部のエルフのみなのです。本当は、種族の違いとか寿命の違いとか関係なしに一緒に暮らせたらいい』

いのですけれど……」

昨日のシャロンの言葉が脳裏を過った。

クレミーが急いで外に出ようと腰を上げたところで、村人らしき男の声がする。

「悪いかどうかを決めるのは君じゃない。俺達だ。それに、君だって七年前のあの事件を忘れたわけではあるまい。そこをどけ、シャロン」

「ですが……！」

なおも食い下がろうとするシャロンに堪えきれなくなって、クレミーは布の戸口から飛び出した。

「出てきたぞ！ 人間だ！」

クレミーの姿を認めた村人達がどよめきの声を上げる。

朝日にくらむ目をこらして周囲を見回すと、芝生の地面にはざつと二十人ほどのエルフの民が居合わせていた。遠巻きに眺めている者も合わせれば五十は下らない。そして衆人に立ちほだかるようにしてシャロンが向かい合っている。

なるほど、昨夜のうちに僕を見かけた誰かが密告したか。

諸人の中には弓や剣を手にする者まで見受けられ、クレミーは状況の穏やかでないのを悟った。

「あ、クレミーさん。おはようございます。昨日はよく眠れましたか？ ごめんなさい、なんだか起こしてしまったみたいで」

クレミーはがくりと脱力した。

この期に及んでそのようなことを口走るシャロンはきつと相当の善人で、とんでもなく変わり者だ。それなりに緊張していたクレミーの身体は彼女の見当違いの一言で一気に力が抜けてしまった。

が、自分に向けられた武器の数々を目にしたクレミーはすぐさま気を引き締め直した。弁明の言葉はいくらでも浮かんだが、ひとまず、鎧も剣も外した丸腰の身で昨日森の中でシャロンにしたのと同じように両手を上げた。口であれこれ言うよりも視覚に訴えた方が効果的であることは実証済みだ。

「貴様何のつもりだ？ 人間」

居並ぶ村人の一人が眉をひそめた。家の中で聞いたのと同じ野太い声。どうやらこの男が村人の代表格であるようだ。

「僕はあなた方に危害を加えるつもりはありません。それをまず分かっていたいただきたいのです」

「ふん、青二才が小癪な真似を。……いいだろう、武器を下ろせ」

男の合図で村人達は渋々構えを解いた。クレミーも手を下ろして真っ直ぐに男を見据える。

「僕はクレミー・ミルフォード。帝都出身の旅人です。昨日、サウサニーに向かう道の途中で見た立て札にしたがってこの森にやって来ました」

「立て札だと？ もしや分かれ道のか」

「その通りです。地図を持ち合わせていなかった僕はそれを頼るほかなかったのです。立て札には右の道には魔物があり、代わりに左の道は安全だと書かれていました。……まるで子供が書いたような拙い字体で」

最後にクレミーが付け加えると、男の足下に隠れていた少年がわめき立てる。

「嘘だ！ こいつ嘘ついてる！ おれはそんなことしてないぞ！」

「どうしたパウ。誰もお前がやったなどとは言っていないぞ」

パウと呼ばれた少年ははっとして押し黙った。

クレミーはその顔に見覚えがあった。いや、忘れもしない。昨日、クレミーの荷物を奪い去った三人の少年のリーダー格だ。やはりこの村に帰って来ていたらしい。となると、目の前の男はその父親だろうか。

「とにかく事情は飲み込めた。だが、クレミーとやら。まだ貴様を信用した訳ではないぞ。七年前の事件だって、我々が人間を信じきったばかりに招いてしまったようなものだからな」

七年前の事件。先程の男とシャロンとの会話にも出てきた単語だ。クレミーは何か自分の知らない、人間とエルフ族との間に根付く

確執のようなものをそこに感じ取った。

頑として受け容れようとしないその男の目は現在進行形でクレミーの全身を嘗め回すように観察している。人間というだけでこれ程までに嚴重に警戒する原因がその事件にはあるのだろう。

「七年前に一体何があったのですか？」

クレミーの当然の質問に、しかし男は難色を示した。強く握られた拳が小刻みに震えている。言葉にするのにも厭悪を伴うらしい。

「あの、クレミーさん。実は、」

「いい、シャロン。俺から話す」

「ペドロさん……」

代わりに説明しようとしたシャロンをペドロと呼ばれた代表格の男は片手で制した。それから頭をもたげる忌まわしい過去を振り払うようにして首を振ると、パウや村人達を各々の家に帰した。

「見せたいものがある。付いて来い」

村の奥地に向けて歩き出すその足取りは重く、鈍い。振り返りざまに一瞬だけ映ったペドロの瞳に悲痛や悔恨といった負の感情がまざまざと滲んでいたのをクレミーは見逃さなかった。

「行きましよう、クレミーさん」

「ああ」

すぐに二人もペドロの後を追って芝生の地面に足を踏み出した。

*

クレミーは眼前の光景にぐくりと生唾を飲み込んだ。出すべき言葉も見つからない。胸の辺りがざわつき、息が詰まった。

村から数分歩いた場所に、その凄惨な景色は広がっていた。

それは焼け野原だった。

見覚えのある同心円状の家屋の配置は七年前まで確かにそこにルンカの村が存在していたことを証明していた。ただし、今は焼け焦げた柱と布の残骸が無残に横たわるだけだ。かつて立派に建立していたであろうルンカの像は腰から砕け、半身がその台座の辺りに転がっている。それが意図的な破壊であるのは疑いようもない。

「これを、人間が……？」

クレミーが掠れる声で搾り出す。

「そうだ」

端的な解答はより深くクレミーの胸に突き刺さった。

正直に言えば、信じられなかった。無論、万人が善良でないことは心得ているつもりだが、それでも、目の前に紛れもない事実として存在する爪跡を過去の人間の所業として受け容れるのには抵抗があった。

「次はこつちだ」

ペドロに連れられ、また少し森を進む。

今度は慰霊碑だった。村と同じく森を切り開いてつくった空間に見上げるほどに巨大な石碑が静かに佇んでいる。苔一つない、清潔に保たれた石碑の状態には村人の亡き尊い『家族』に対する厚い情念が表れていた。その表面には当時無念にも散っていった故人の名前が連ねられている。

「偉大なるルンカの遺志を継ぎ、故郷を護りし誇り高きエルフの民、ここに眠る……」

クレミーが石碑の最後に刻まれた文句を読み上げると、隣に立つシャロンがぐすんと鼻をすする音がした。何度もここを訪れたであろう彼女にとってもこの悲しみは決して拭い去れない心の傷となっているのだ。

「人間はな、」

ペドロは感情の読めない声色で切り出した。

「おそらくエルフを疎んでいたんだ。いや、『疎んでいる』のかも

しれない。ともかく自分達よりも長い寿命を持つエルフのことが不気味でしかたがなかった。だから村を焼き払った」

「そんな。それだけの理由で」

村一つを滅ぼすなんてことがあり得るのだろうか。

クレミーはやはりどこか腑に落ちなかった。確かに人間の中には性根の腐った下衆のような連中もいるにはいる。だが、七年前の事件は本当に単純な悪意による犯行だったのだろうか。

何かが引つ掛かる。

「まあ他にも、この森のどこかに眠るといわれるルンカの秘宝を狙っていたなんて諸説もあるがな。まったく、あいつらはそんなありもしない逸話の為に死んでいったってのか。はっ、ふざけやがって」

冗談じみた口調とは裏腹に、ペドロはそつと目頭を押さえた。初対面の厳つい印象との落差がその悲壮感を一層引き立たせる。

思った以上に確執は深かったようだ。

しかしながら、クレミーはペドロの最後の話の中に一つ思い当たる節があった。

あれはいつぞやのことだったか。とはいえ、幼心地に残っている記憶といえば祖父デミトリアスの荒唐無稽な語り草くらいなものなのだが。

そう、ルンカだ。ルンカにまつわる秘話があったはずだ。それだけでなく、現在のエルフと人間との関係にもつながる重要な挿話が頭の片隅で疼くわずかな記憶に手を伸ばし、やおら紐解く。

あれは、確か。

病床に臥したデミトリアスを見舞うため、少年クレミーは祖父の病室を訪ねていた。彼の来訪に気が付いた医師や侍女達はにこやかに病室を去って行き、やがて二人きりになった。

お気に入りの孫の姿を認めると、デミトリアスは皺をいっばいに寄せて破顔した。クレミーはその柔らかい笑顔が好きで、こうして毎日見舞いに来ていたのだった。

「ルンカという名を知っているか、クレミーよ」

「いいえ。存じ上げません」

「太古に生きた偉大なるエルフの祖先の名だ。エルフのことは知っているか」

「はい、書物で見たことがあります。耳がこんなに長くて……」

クレミーは嬉しそうに挿絵の真似をした。「そうかそうか」と満足げに彼の頭を撫でながら、デミトリアスは話を続ける。

「そのルンカはな。昔、盗賊だったんだ。人様の物を盗む、悪いやつだ。奴は仲間のエルフとともにたくさんの街や村を襲い、金銀財宝をかつぱらった。やがて各地で悪名が広まり、身動きが取れなくなった奴はとある森に逃げ込んだ。それから奴は森の奥地にエルフの村を建て、そこに腰を据えた。……おっと、付いて来ているか、クレミー？」

デミトリアスは思い出したようにクレミーの顔を覗き込んだ。

「はい。大丈夫です」

本当は、わからない言葉がたくさんあったけれど。

「そうか。賢い子だな、クレミーは。……そこで盗賊から手を引いたルンカは今まで人々から盗んできた宝をどうするべきか悩んだ。持ち主に返すのも忍びない。所持しているのにも危険が伴う。悩んだ末に、奴は全ての盗品を森のどこかに隠すことに決めた」

身振り手振りをつけて説明すると、クレミーは身体を乗り出すようにして聞き入った。

「そのお宝は今、どこにあるのですか？」

「へっ？」

興味津々といった様子のクレミーに、デミトリアスは顎に手を当てて考え込んだ。

「うーむ、どうだろう……。ずるがしこい奴のことだから、案外、地面の下にでも埋めていたりしてな。なんてったって、ルンカはこのセントラルバニアの包囲網から歴史上唯一逃れられた犯罪者だからな。何を考えたっておかしくはない」

「ずっと昔のお話なのに、どうしてお祖父様おじいさまはそんなことを知っているのですか？」

デミトリアスは顔を引きつらせると、ごまかすように窓の外を見た。

「は、はは。実はこれは伝記にあつた話なんだ。だから儂が直接見た訳ではないし、確証はないんだが、」

「なーんだ。じゃあ嘘かあ」

あからさまに気を落とすいじらしい孫の姿に堪えられず、デミトリアスは胸を張って答える。

「嘘かどうかはまだ決まっていなあい！ 儂はいつかその森に向向いて、財宝を独り占めしてやるつもりだ！ その時はクレミー！」

「は、はいっ！」

「……お前も付いて来てくれるか？」

「えっ。はい、行きます！ 絶対に付いて行きます！」

クレミーがぱあつと顔を輝かせたのを見て、孫に目がない祖父はくしやりと相好を崩した。

それから数ヶ月後、デミトリアスは静かに息を引き取った。森に隠されしルンカの秘宝を手に入れるという野望は、ついに果たせず

クレミーが話し終わると、シャロンは息を飲んだ。ペドロも驚きを隠せないでいる。

「初耳です。まさか、あのルンカが盗賊だったなんて……」

「いや、突っ込むべきはそこじゃないだろう」

「えっ？ どういうことでしょうか、ペドロさん」

小首を傾げるシャロンに、ペドロは呆れ果てた。

「……はあ。じゃあ聞くが、クレミーさんよ。お前さんはいつからセントラルバニア帝国の皇子様になったんだ？」

「あっ」

クレミーとシャロンの声が重なった。

しくじった。エルフと人間との関係を追究するあまり、つい口を滑らせてしまった。せつかくシャロンにも隠していた素性をよもや自分自身の口から露見することになるうとは。

クレミーは開いた口が塞がらなかった。

ペドロは放心状態の二人を一瞥して、小さく溜め息をついた。

「別に驚くこともない。黒髪黒眼なんて世の中そういるもんじゃないし、少なくとも俺は帝国の第二皇子様以外にそんな外見をしているって奴を知らない。だから、初めてお前さんを見たときからもしやとは思っていたんだが、まさか本当だったとはな。ふん、こんな隔絶された森の中だったら帝国の情報なんか伝わっていないだろうとか高を括っていたんだろう」

ペドロの鋭い一言一言が凍りついたクレミーの心を容赦なく抉っていく。

「で、でも。クレミーさんはクレミー・ミルフォードさんですよ。全然、ドイルじゃないです」

「おそらく偽名だな。大方、母親の旧姓ってところか」

全部バレてるよ。

「そ、そうなのですか？ クレミーさん」

驚くシャロンにクレミーは力なく頷いた。

できれば再び帝都に帰るその時までは何人にも身分を明かすつもりはなかったのだが、放浪二日目にしてその目論見は完膚なきまでに破られてしまった。しかし、知られてしまったものを今更なしにしてくださいとは言えない。

「あの、できればこのことは……」

「分かってるよ。村の奴らには黙っておけばいいんだろう。特別隠すほどのことでもないと思うがな」

そこでクレミーの正体についての勘ぐりのあれこれは一旦打ち切られた。

自然に話はルンカの来歴へと遡る。

「……やっぱり、ルンカが盗賊だったなんて信じられないです」

突如告げられた意想外の事実、シャロンは少なからずショックを受けていた。尊敬する人物が実は街から街へと物品を強奪して回る盗賊だったといわれればそれも無理はない。

「実はね、シャロン。御祖父様の死後、僕は生前に御祖父様が愛読していたという伝記を探してみたんだ。一度は城を総動員して搜索したりもしたんだけど、とうとう見つけることはできなかった。だから、はつきり言って信憑性はかなり低いよ。あの突飛な御祖父様のことから、ルンカのエピソード自体が全部嘘だったなんてのも十分にあり得る」

「そうなのですか……。残念ですね」

「その時、僕は十歳くらいだったから、きっとお祖父様にだまされたのだと思う」

シャロンはしょぼんと肩を落として俯いた。もし財宝の存在が真実で、それを掘り出すことができれば、そしてその財宝を人間側に返還することができれば、きっとルンカの罪は浄化される。そうすれば、人間とエルフとの間の確執も取り去ることができるかもしれない。少なくともそのきっかけにはなるはずだ。そこまで考えたの

だが、唯一の証拠である伝記の在り処が不明では、村ぐるみで発掘作業を執り行うための理由としては不十分だ。やはり物的証拠がなければ話にならない。

「そういうことなので、ペドロさん。やっぱり地下には財宝なんて

」

「ある」

遠慮がちに告げるクレミーを、ペドロは片手で制した。

「……はい？」

「詳細は後だ。まずは長老様の所へ行くぞ」

「ちょ、長老？」

話の展開についていけないクレミーを置いて、ペドロは脇目も振らず村へと駆け出した。取り残されたクレミーは縋るようにシャロンの方を見やったが、彼女はもつと頭の上に疑問符を浮かべていた。こりやだめだ。

「シャロン。事情は飲み込めないけど僕達も後を追おう」

「ええつと……ルンカが盗賊で……伝記がなくて……でも財宝はあつて……ええええつ！？ どうして！？」

「シャロン！ 混乱するなら後にして！ 僕一人じゃ村に帰れないから今は案内をお願い！」

「は、はいいい！ 行きましょう！」

ぐるぐると目を回していたシャロンはやっと我を取り戻して走り出した。

「つて、そつちは逆！」

「あれれ、村つてどつちでしたっけ！？」

これまた前途多難の予感だった。

とある森の手前に大型の電動車が停まっている。

唸りっぱなしの機関は腹の底に響くような重低音を辺りに撒き散らし、小鳥を退け草花を揺らして穏やかな朝の一時を台なしにする。この場所に駐在してから丸一日ほど経っているが、昼夜関係なくこの調子だった。しかし、おいそれとエンジンを切るわけにもいかない。近隣町村の自警団に見つかった時のことなどを考えると、いつでも逃げる準備を整えておく必要があるためだ。

「俺様は悪人だ。それもかなりの悪人だ。その部下であるおめエらもかなりの悪人だ。だからその辺の小物どものようにチンケな窃盗や無意味な殺人はしねエ。なんてったって、俺様達『レッド・ギャング赤目盗賊団』が目指すのは世界一の大悪党だからなア！　そうだろプチ！」

広い車内、額にバンダナをした長髪の若者は邪悪な笑いを含みながら隣に座る男に赤い瞳を向けた。プチと呼ばれた神経質そうな男は忙しなく眼鏡の位置を気にしながら、仏頂面で頷いた。

「おっしやる通りでございます、若」

その返事に赤目の男は満足そうに、ヒヤハハ、と笑った。

「……ですが、できれば私のことわたくしはモンティとお呼びいただきたいく

」

「おっとプチ、ちょっとそこの布取ってくれるか」

「……了解致しました」

と、不服そうにしながらも若者に従う男の名はプチ・モンティ。

盗賊団の参謀を務める知将であると同時に、団長の世話係も兼任している。そして先程から無心に愛用のファルシオンを研いでいる眼光の鋭い若者が団長の口口・レッド・ギャングレッドアイである。

彼ら赤目盗賊団は昨日の昼頃から、ある分かれ道の立て札を目印に駐留していた。

「お頭！　斥候部隊が戻ってきやした！」

子分の一人が開いた車の窓に顔だけ突っ込んで言った。

「部隊っておめエ、行ったの一人だけだろオがよ。で、どうだった」
「はい！ やはり情報屋の言っていたことは正しかったようです。」

昨日森の中に入って行った男はセントラルバニアの皇子で間違いありやせんでした！」

そりや吉報だア、とロ口はにやりと口を緩めた。さっそく動き始めようと腰を上げたところで、

「あア？」

例の看板が目にとまった。

『みぎ……まもの。ひだり……あんぜん』

絵と文字の間のような粗雑な字だが、書いてある内容はためだ。一体誰がこんなくだらないことをするのか。大悪人としては見過ごせない。

「さつきから気になってたんだが……あれア何だ？」

団員はくりと分かれ道を振り返ると、

「いえ、あっしらにもわかりやせん。子供のいたずらか何かでしょう」

さっぱり、といったふうに関手を上げた。

「ごしごしと眼鏡のレンズを拭いていたプチも看板に興味を示し、窓に鼻を擦り付けるようにしてそれを見てみた。」

「ははあ、なんと汚い字でございましょう。……む？ この森……まさか」

あん？ とロ口はその言葉に引っかけかりを覚えたが、まあいいかと立て札から視線を外した。天井に頭をぶつけないように猫背で運転席に向かいつつ、そこでふと思ひ出したように呟く。

「そっういやア、親父が昔、この森にいるエルフは財宝を隠し持っているとか何とか言ってた気がすんなア」

「……エルフ……財宝……」

プチは急に頭が痛くなったようにこめかみの辺りを押さえた。

「どうしたよ？」

「嫌な出来事を思い出しました……」

冷静が取り柄のプチが苦悶に顔を歪めている。予想外の反応に、口口は戸惑ったように後部座席を振り返った。

「ンだよ。ここで何かあったってエのか？」

「ええ。過去、この森で起きた事件でございます……」

滴る冷や汗を拭いながら、プチは口口に語って聞かせた。

それは七年前、プチがまだ赤目盗賊団レッド・キヤングの参謀ではなく、別の盗賊団に所属していた時代の話だ。

*

逃げ惑う人々。鳴り止まない悲鳴。人体の燃える嫌な臭い。

なぜ、こんなことになっている？ プチは頭を掻きむしった。

ルンカ村が火の海と化している。なぜか、だと？ そんなのははつきりしている、団長の仕業だ。

そして今、プチの目の前では崩れた家の下敷きになった母と娘が必死にこちらに助けを求めている。暗闇を払う真っ赤な火炎は家から家へと燃え移り、徐々に森を消していく。彼女達がいる所に火の手が回るのも時間の問題だった。

だが、プチには彼女達を助けることができない。

「モンティ！ 何してる！」

さっさとずらかるぞ、と後ろから仲間が急ぎ立ててくる。

「くっ……！」

わかつている、一刻も早く仲間のところまで戻らなければ。ここにも直に炎が回ってくるだろう。プチだって全くもって安全なわけではないのだ。宝は手に入らなかったが、たまにはそういうことだ

つてあるだろう。団長だって「無いもんは仕方ないな」と笑ってたはずだ。

だから早く戻って、寝心地の悪いシートで夜を明かそう。そう思っているのに、体が動かない。目の前の光景から目が離せない。

「おい！ 早くしろ！」

「……ああ」

仲間が見ている手前、あの母子おやこを引つ張り出すことは許されない。だからといって罪なき村人を前にして見て見ぬふりで逃げ出すほど非情にもなれず、ただ眺めていることしかできなかった。

立ち尽くすプチの横を何人もの村人が走り去っていく。彼らは皆、炎の魔の手から自身を守るのに必死で、他人には目もくれていない様子だ。

それも当然か。プチは妙に納得したように眼鏡を押し上げた。

「何故ですか……団長……」

計画ではここまでするつもりはなかった。今回の一件に関しては、全ての責任は団長の独断にある。

だから私はわたくし悪くない。何も悪くないのに、

「何故、あなた達はそんな……まるで悪魔か何かを見るような冷たく恐ろしい目で、私を見るのだ！」

母子おやこに向かつて吼えるが、死の危険に晒された彼女達には聞こえていなかった。

動けない彼女達に炎が迫る。もはや悩んでいる時間はない。この先、盗賊稼業を続けていく以上はここで情けをかけるわけにはいかないのだ。

『心など捨ててしまえ、重荷になるだけだ』

団長も言っていた。

だが。

プチはもう一度眼鏡を直すと、ずっと彼女達に背を向けた。そして走り去ろうとする村人の服の裾を大急ぎで引っつかむと、深々と頭を下げた。

「逃げ遅れた母子おやこがいるんだ！　まだ助かる！　手伝ってくれないか……頼む」

＊

「あれから間もなく、私わたくしはあの盗賊団を脱退いたしました。しかし、一度悪事に手を染めた私わたくしが真つ当な職に就けるはずもなく、有り金が底について、餓死寸前で倒れていたところを先代に拾われたというわけでございます」

ロロは考え込む。

七年前だと、ちょうどロロがまだ盗賊団に入ったばかりの頃の話だろう。先代団長の父とプチの繋がりはそこからということになる。「にしても、財宝かア……。そいつア、どんなモンだ？」

「私の記憶に間違いがなければ、確か……大盗賊ルンカが己の死を目前にして、自身の魂を封じ込めたと云われる、呪いの指輪」

「そりゃ大物だなア！　んじゃ、ついでにそれも頂いてつかア！

おっと、村人を殺したりしちゃダメだぜエ？　何度も言うように大悪党は無意味な殺しはしねエんだ」

ヒヤハハハ！　と高らかに笑うロロを見て、プチは溜め息をついた。

若、あなたは盗賊には向いていませんよ、と。

＊

ペドロが長老と呼んだのはルンカの村長のことだった。本来は村の長をそのように称する習慣はなかったのだが、現長は大抵の場合一世代でその任期を終えるべきその任をなんとペドロの二つ上の世代から三世代にまたがって務めており、加えて、老熟による威厳や豊富な人生経験に基づく判断力は並々でないため、村人達は敬意を込めて『長老』とそう呼ぶようになった。

というのは表の話で、実のところは、彼の年齢がエルフ最長記録を今なお更新中であるということに由来する。

村へ帰る途中に、クレミーは大体そんなような内容をシャロンから聞いた。というよりも、彼女が勝手に喋り出したといったほうが近い。よほどその長老のことを敬愛しているのか、彼女の語りはどこか誇らしげだったように感じた。

たっぷりと回り道をして、二人はようやく村の外周まで辿り着いた。

「はあ、はあ。シャロン、はいいよ……」

「そうですか？ わたしはいつも通りですよ」

足場の優れない森林を疾走したためにクレミーは息も絶え絶えだが、なぜかシャロンの呼吸は微塵も乱れていなかった。同じ距離を走ったのかと思わず疑いたくなるほどに。

木立を蹴り、根や草をかわし、枝から枝へと飛び移る。まるで小動物のように俊敏な身のこなしは紛うこと無きエルフの証だった。生まれ持った身体能力の差というよりは、彼女の幼少時から鍛え抜かれた運動神経と特殊な環境下で発達した類稀なる動体視力がそれを可能にしているのだろう。

それなのに、方向音痴とはどういうことか。クレミーは呆れたようにシャロンの横顔を見やる。

なんだかシャロンには出会った時から呆れてばかりだな。

シャロンはそんな視線に気付かず、ばててしまったクレミーを案

じて意識してゆつくりと歩くことにした。といっても、外周地点から長老の家までは数分と掛からないのだが。

「……長老様は、」

すると、これまで喜色満面に長老の自慢をしていたシャロンの表情に陰りが差した。ただしそれは悲しみとは少し異なって、どこか遠くを見るような落ち着いた面持ちだった。

「わたしのひいおじいさんにあたります」

何を言い出すかと思えばそんなことか。クレミーは若干拍子抜けしたが、おくびにも出さなかった。

「そうなんだ。それならシャロンも鼻が高いね」

クレミーが笑顔を見せると、シャロンも合わせるように乾いた笑いを漏らした。

「……返事を誤っただろうか。」

「ごめん。なにか気に障ったかな」

慌てて尋ねるが、シャロンは遠くを見たままだ。

「……クレミーさん。言ってますんですけど、わたし実はハーフエルフなのです」

「え……？ あ、うん。それってつまり、人間とエルフの間の子っていうことだね？」

「ええ、父が人間で。ですが、わたしの両親はここにはいないのです。例の事件の後すぐに、幼いわたしを置いて村を出て行ってしまいました」

「……なぜ？」

「それはわかりません」

しかしすぐにシャロンは小さく首を振った。

「いいえ、本当はわかっていのです。おそらくは父のせい……。人間だった父は、あの事件の後、この村にはいられなくなった。そういうことだと思います」

七年前の事件はエルフと人間との間に確執を生んだ。エルフは人間を憎み、そしてそれはシャロンの父も例外ではなかった。肩身の

狭くなったシャロンの両親は、罪なき娘だけを置いて静かに村を去ったというわけだ。

「でも、どうしてシャロンを置いて行ってしまったんだろう」

クレミーはふと浮かんだ疑問を投げかける。一緒に連れて行けばいいだけの話ではないか。

「あの頃のわたしはまだ自分がハーフエルフだということを知らなかった。周囲の大人達もそのことを意図的に隠している様子でした。多分、わたしには黙っていいよということになっていたのでしょうか。ですが、隠し通せるはずありません。だって、成長の速度が違うのですから」

「え？ どういうこと？」

無邪気に尋ねるクレミーを、シャロンは「ふふ」と慈しむような優しい笑顔で見返した。

「森の中でわたしと出会う前に、エルフの子供達を見ましたよね」

「うん。……って、うわっ！ 僕の鞆！」

クレミーは昨日の出来事を思い出して、悔しげに唇を噛んだ。

「あ、すっかり忘れてました。後で取りに行かないといけませんね……と、それは置いといて。実はあの子達とわたしは同年なんです」

さらりと言つてのけるシャロンに対して、クレミーは衝撃の事実にぎよつと目を剥いた。金魚のようにぱくぱくと口を動かし、したり顔のシャロンを穴が開くほど見つめる。

あり得ない、と言おうとして、踏みとどまった。その言葉がシャロンを傷つけたりはしないだろうかという迷いが過よぎる。

「信じられませんか？」

「……うん」

クレミーの腰ほどまでしかなかったあの少年達と、目の前にいるクレミーと大して背丈の変わらないシャロンの年齢が同じなどとは、到底信じられない。信じろという方が無理がある。だが、人間とエルフという種族差は、ときにクレミーの中のいわゆる『人間の常識』

を覆すなんてことも少くない。

例えば、ある人間が巨人族に向かって『なぜあなた達はそんなに大きいのですか？』と問い掛けたとする。すると、彼らは腹を抱えて笑い出すことだろう。『何を言っている。お前達が小さいだけだ』と。人間は腑に落ちず、反論する。巨人も譲らない。

つまりはそういう次元の話なのだ。相手の常識を知り、その範疇で考えることなしには、別種族における相互理解の術はあり得ないのだろう。

「そもそも、エルフは『寿命が長い』という前提が間違っているのです。正しくは『成長が遅い』。特例のハーフエルフであるわたしはどうやら外見以外はすべて人間の方に似たみたいで、あの子達と同年なのわたしの方が成長しているように見えるのも、それが理由なのです」

シャロンは驚愕するクレミーを尻目からくりを説明した。クレミーは「なるほど」と手を打ち、続きを想像する。

特例故にエルフ達は彼女の性質を予想できなかった。他の子供達と自分の成長の差に勘付いたシャロンは周囲の大人達を問い質し、結果、事実を知ることになった、と。

クレミーが黙り込むと、シャロンは「話は少し変わりますが」と前置きした。

「長老様いわく、わたしの祖父は若くして戦死して、祖母も後を追うように伝染病で。そして両親は蒸発。……そんな具合で、兄弟もいないわたしは長老様とずっと二人ぼつちなのです」

紡がれる言葉の割にはシャロンは落ち込んでいない。諦めたような疲れた笑いが彼女の表面を覆っていて、何を考えているのかまったく読み取れなかった。

どうして僕にそんな話をするんだろう。

クレミーはシャロンの顔色を窺いながら、何と声を掛ければいいのか量りかねていた。元来、街の教導学校に通わず、城の中で専属の家庭教師に教育を受けていたクレミーは極端に他人との関わりが

少なかった。だからなのか、こういった深刻な場面に対する免疫のようなものが不足していた。

下手な慰めよりは沈黙を選べ。クレミーは口を閉ざすことしかできない自分に苛立った。

「あ、そんなに気を遣うことはないですからね。わたしがお話ししたいのはむしろここからですから」

クレミーは横を歩くシャロンの方にちらりと視線を向けて続きを促した。

「長老様……いえ、おじいさまは魔術師なのです。それもエルフの中でも飛び抜けて優秀な」

「へえ。やっぱり長老というだけあるんだなあ」

クレミーは三角帽子に大きな木杖というお決まりの老魔術師の姿を想像してうんうんと頷いた。シャロンはそれを不思議そうに眺めていたが、すぐに視線を進行歩行に向け直した。

「わたしの魔術もおじいさまに教わったものです。おじいさまは、両親に捨てられて傷つき閉じこもり気味だったわたしに魔術を授けてくださいました。その頃のわたしにとってそれは唯一の拠り所で夢中になって練習に励みました」

「そうだったんだ……」

気になっていたのだ。なぜシャロンは村の外れで一人で暮らしているのか。今、その謎が少し解けたような気がした。

おそらくシャロンは初め村の中でも異端に近い扱いを受けていたのだろう。親という後ろ盾を失った彼女に浴びせられる奇異の視線の威力は計り知れず、周囲からの砲火を直にその身に受けることになった彼女は手近な拠り所を求めた。支えといってもいい。本人はそれが魔術だったと言うが、つき詰めればその先にある長老への自己顕示だったに違いない。

二人が歩を進めるにつれ、点のように小さかったルンカの像がしだいに大きくなっていく。シャロンが真っ直ぐに銅像を目指していることからして、やはり長老の家は中心にあるようだ。

「でも、わたしがハーフエルフだからかな。あまり魔術は得意ではないのです。おじいさまも、そんなに練習しているのになぜ上達しないのかと不審がつていらっしやいましたし」

シャロンは悔しげに肩を落とす。見るに堪えないクレミーはそのしよげた肩にぽんと軽く手を置いた。

「人間もエルフも等しく魔術を使えるんだ。混血だからできない道理はないよ」

「……そう、かな。ええ、きっとそうですね。ありがとございませ、クレミーさん」

シャロンは救われたように、きゅつと目を細めた。が、すぐにその笑みは固まって、

「あら？ でもそれって、結局はわたしの才能がないってことになっちゃいませんか？」

クレミーを責め立てるような表情に変わった。

「いや、その、誰しも得手不得手があるっていうから……シャロンだからって……わけじゃないというか……」

しどろもどろになるクレミーの肩をシャロンはぐつと掴み返して、がくがくと前後に揺らした。

「やっぱり才能ないってことじゃないですかー！ ちょおーっと自分の魔力量が多いからってそれはひどくないですか？ 確かに魔力量も魔術には大切ですけれど、真に問われるのは術者の技術や器量！ つまりセンス！ っておじいさまがおっしゃってました！」

シャロンがヒートアップすることに、クレミーの視界が大きく上下する。

「うわわわわ！ じゃあ、シャロンには、センスがないんじゃない？」「ちがいますー！ わたしは体質です！」

そうこう言い合ううちに銅像の前まで来ると、シャロンは近くの長老の家らしき建物の前で足を止めた。

相当年季の入った大きな家で、シャロン宅の数倍はある。傷だらけの支柱には至る所に修繕の跡が見られ、長い歳月を感じさせた。

二人は中に入る。

「あ」

クレミーは最初に自分の想像していた家の内装とのギャップに目を丸くした。長老の家の中もきつと単純にシャロンの家を押し広げたイメージだろうと決めてかかっていたのだ。だが、実際には出入り口側半分が会議などに使われる集会場に、奥側半分が長老の生活空間になっており、その間は外布と同じ厚い生地のカートンで仕切られている。ただし、半分のスペースといえども一人で暮らすには十分すぎるほどの広さだ。

この家は個人の所有物なのだろうか。クレミーは入口に立ったまま、きよろきよろと天井や壁にかけられた装飾品などを眺めた。

「村長になった人は、任期中はこの家で生活することになっているのです。……ただ、うちのおじいさまはこの家を手放したくないばかりに村長を続けているようにも見えるのですよね」

シャロンが横からさらりとクレミーの疑問を解消する。

すると奥からペドロが仕切りをくぐってのっそりと姿を現した。

「随分と遅かったな」

「まあ、色々ありました」

「そうか。たった今、長老との相談が終わったところだ。これから村人をここに集めて決定事項を伝えるつもりだ。お前さん達も同席してくれるか」

「了解です」

シャロンはこくりと頷いた。

ペドロは壁に引っ掛けてあった巨大な貝殻のような笛を手にとつて外に出ると、先を空に向け、思い切り息を吹き込んだ。汽笛のような間の抜けた低い音が村中にこだまし、それに応えるように一人また一人と家々から布を割って立ち現れた。

「ここに村人全員は入りそうにないけど……」

クレミーは集会場に並べられた椅子の数を見て心配そうに呟く。

「各家の代表者一名だけが来る決まりになっていますから」

「そういうことか」

ざっと村の家の数を頭に思い浮かべてみた。ところが、どうにも数えにくい。なぜなら、ルンカの村は土地の広さの割に家の数が少ない、つまり密度が低いからだ。だから家の数が多いのか少ないのかも判断しがたい。

クレミーが脳内で計算を行っているうちに、代表者が一堂に会した。シャロンと肩を並べるうちは感じなかったが、エルフ族は比較的背が高い傾向にあるようだ。人間の平均身長を底上げしたような塩梅だ。

ああ、なんだかまた小人になったみたいだな。クレミーは居心地の悪さを紛らわすように、左手につけたバックラーをいじった。

最上席に座ったペドロが一つ咳払いして注目を集める。

「諸君、前置き抜きで話す！ 人間どもがぬかしていた我らエルフの始祖ルンカが隠したといわれる秘宝だが、この森に潜んでいる可能性がある」

今更何を、という声が聞こえてきそうな表情で一同が眉根を寄せた。だだをこねる子供をなだめる時のような生ぬるい雰囲気が集会場内に立ち込め、村人達は嘲るようにペドロを見た。

「どういう風の吹き回しだ？ 宝なんて七年前までに幾度となく探したじゃないか。さてはペドロ、もうボケたのか」

「ペドロさん、あんたあの事件を忘れちゃったのかよ。ここには宝なんてない。そんなでたらめ言つて、もしまた村が焼かれたらどうするんだ。ちつたあ村のことも考えてくれよ」

次々と浴びせかけられる批判の文句を聞き流しながら、ペドロはふうと溜め息をついた。

「クレミーよ」

「はい？」

「例の話を頼む」

なるほど。だからここに居させたのか。

「いいんですか？ 確証はありませんよ」

「構わんさ」

クレミーはできれば口を挟みたくなかった。この状況で例の話をした際の村人達の反応が想像するにおそろしかったのだ。宝の存在さえも否定しているというのに、それ以上に突飛な内容を伝えれば相応の反論の嵐が待ち受けているに違いない。

「はあ。実は……」

クレミーはいささか躊躇いつつもデミトリアスの語ったルンカの史話を村人達に話して聞かせる。盗賊であったルンカ、村の誕生、そして地下に隠された秘宝。もちろんクレミーが皇族であることは伏せておきつつ、その他のことはシャロンやペドロの時と同じく伝えた。村人達は話の途中何度か物言いたげに口を開きかけたが、ペドロが終わるまで一切の口出しを禁じたので最後まで清聴を保った。「……という話を聞いたことがあります」

クレミーが口を閉じる。

村人達がペドロの方を見やると、彼は無言で頷いた。禁止を解除するという意味合いだ。

「しかし、なんと地下にあるとは。信じられん話だが、なるほど確かに地下は盲点だった」

「人間どもは地上ばかりに目を向けていたからな。我々も先入観に捉われていたようだ」

そこでペドロは勢いよく木机に手を突いて立ち上がると、一同を見回した。

「そして今回、その発掘作業を決行することになった！」

「……何？」

刹那の間ペドロの気迫に圧された村人達だったが、当然口々に反論を始める。

「貴様、まだそんなことを言っているのか！ 宝など、いたずらに人々の目をくらませ災厄を引き起こすだけの代物に過ぎんだぞ！」

「先の反省を生かし、現在の安寧を守るのが生き残った我々がとるべきただ一つの道ではなかったのか？ 宝の存在を知ろうとも、我

々のその姿勢には何ら変化はないはずだ」

すると何者かが部屋の仕切り布を分けて姿を現した。

「そう熱^いり立つでない、若者達よ」

「長老様……！」

卵色の緩やかなローブを着込んだ老人、長老オイゲンは子供を諭すように優しい声で言った。その頭には三角帽子は乗っておらず、そのか細い手にも魔法の木杖など握られていなかった。代わりに、指に何本か指輪がはめられているだけだ。

期待はずれの長老の格好に、クレミーはいささか落胆した。

「わしの父ルンカは生前、決して自分の過去を語ろうとしなかったところが今回、父は盗賊だったという話ではないか。さすれば、あれだけ素性を隠したがつたのにも納得がいくというもんじゃ。そして、父の宝は元より人間の財産。それを我らエルフが隠匿しているというのは、世の理に反するとは思わぬか。そうじゃろう、皆の衆」

「し、しかし！ 人間側はその宝のために村を……！」

「憎しみは何も生まれぬ。どちらかが落とし前を付けねば因縁は消えぬのだ。何より、わしには父の罪を償う責任があるのじゃ」

村人はぐつと口を閉ざして俯いた。

その中でクレミーだけが別の点で驚きを隠せなかった。

「あの、ちよつといいでしょうか。ルンカつてずっと昔に生きていた人ですよ。あ、エルフか。そのルンカが長老様のお父上というのは、時間的に合わないと思うのですが……」

オイゲンはぽかんと口を開けた。

「何を言っておる、旅人よ。ほんの数百年前の話ではないか」

「え？」

「エルフは人間の何倍も生きる。ぬしらにとっては伝記で見る過去の遺物なのかもしれんが、わしにとつてはついこの間の出来事よ」

ほっほっほ、とオイゲンは声を上げて笑い出した。

「ええええっ！？ エルフの寿命つてそんなに長いの！？」

クレミーは驚嘆してシャロンを振り返った。確かに成長が遅いと

いう話は聞いたが、そこまで生きるとは思ってもみなかった。

「ええ。おじいさまだけは、ちよっぴり特別ですけどね」

「そんな、数百年だって……」

クレミーは衝撃の事実にしばし頭の整理の時間を要した。

もはや別次元の話だ。デミトリアスが伝記で読んだ人物が、たった今日の前にやにやと口元を緩めている老人の父親なのだ。それがどれだけ驚異的なつながりであるかは想像に難くない。魔術師アレンと初めて対面した時以上の驚愕がそこにはあった。

「ともかく。事実を知ってしまったからには、見て見ぬふりはできぬ。皆の衆よ、ちよいとわしにその若い力を貸してくれんかの」

「しかし……百歩譲って探すにしても、地下だけでは情報が足りなすぎます！ 森中を掘り返す気ですか！」

「なあに、宝の在り処の目星はついとる。手伝ってくれるな？」

自信満々のオイゲンの言葉に、村人達は一も二もなく頷いた。

長老オイゲンは村の魔術を扱える者の中からとりわけ優秀な者を選別し、急造の発掘隊を編成した。その中にはペドロの姿もあり、クレミーは少しだけ意外に感じた。

発掘作業は昼過ぎから行うということで、クレミーとシャロンは一旦郊外にあるシャロン宅に戻り、遅めの朝食を摂ってから、昨日入り損ねた公衆浴場に向かった。

それは河川水を利用した露天風呂で、給湯には火の魔術を用いているのだと行く途中にシャロンが教えてくれた。

簡単に入浴を済ませ、再び長老家の前に集合した頃にはちょうど約束の時間になっていた。

「では行こうかの」

オイゲンを先頭に、蛇が這うように発掘隊がぞろぞろと森の中を進んで行く。その行程はついさっきクレミー達が往復してきた道と全く同じで、クレミーはだんだんとオイゲンの考えが読めてきた。

「この先つて、やつぱり……」

「ええ、そうみたいですな」

シャロンも同じ結論に至ったらしく、二人で顔を見合わせた。旧ルンカ村。

賊徒によって根絶やしにされた悪夢の村。

今朝見た焼け野原の光景を思い出し、自然、表情は硬くなる。

「ここじゃ」

予想通り旧村に着いたところでオイゲンは足を止めた。村人達も半ば予想できていたようで、特に驚いている者はいなかった。

シャロンは無残な村の跡地を見回しながら、

「おじいさま。この村、というだけでもまだ範囲が広すぎると思うのですけれど……」

心配そうな顔でオイゲンを見やった。

「ほっほ。隠すというからには大抵、目印となる物があるもんでな」とことことひよこのような足取りで村の中へと歩いていき、やがて中心まで辿り着くと、クレミー達の方を振り返った。

「常識的に考えたら、目印はこれであろっ？」

「なるほど……！」

クレミーは感心の吐息を漏らした。

オイゲンが指差しているのは、腰から碎けたルンカの銅像だった。その下には当然、像を支える台座があり、台座の底は地面に突き刺さっている。おそらくその先には転倒防止用の銅板が埋まっていることだろう。重量がある上にがっちり固定された台座ごと銅像をどかしてまで、その下の地面を掘ろうと考える者はまずいない。そのうえ灯台下暗しという効果も望めるから、隠し場所としては最適だ。

「ルンカというのは、随分とずる賢い人だったみたいだ」

「うーん、それは肉親として喜ぶべきなのでしょう……」

シャロンは考え込む。

「盗賊としてはとびきり優秀だったみたいだし、とりあえず誇っていいんじゃないかな」

「悪い人は嫌いです！　悪いことをするから、悪いことが降りかかるんです！」

「ご、ごめん……」

予想外の剣幕にクレミーは目をぱちくりさせた。

「その若いの二人。乳繰り合っているところ悪いがの、ちよつとこつちへ来なさい」

「ちちくツ……！？　おおじいさま！　わたしはそんなつもりではありません！」

ぽつと顔を赤くしてオイゲンの下へ詰め寄って行くシャロンの後を、クレミーはさも他人事のように苦笑しながら追いかけた。

発掘隊として集めたエルフの魔術師達は銅像を囲むように円形に並び、それぞれ木製の杖を構えている。

「これから村の者達で一斉にこの像を持ち上げる」

「持ち上げる……って、魔術ですか？」

クレミーは首を傾げた。

「そう、今回なら空中浮揚^{レレイト}じゃな。そなたは魔術に興味があるとシヤロンが言っていたからの、近くで見ておるとよい」

言うが早いか、オイゲンは村人達に手で合図した。

がくんと地面が揺れ、半身だけの銅像がぶるぶると振動し始める。徐々に振幅が大きくなり、ほどなく巨大な手に引っぱり上げられるように像が上向きに浮かび始めた。すると、銅像の周囲の地面が四角形に盛り上がり、板らしき物が姿を現した。その面積は台座の底面の何倍もあり、明らかに銅像を支える以外の意図が見受けられる。「ほほ。これは予感的中じゃの」

台座の下には人一人がやっと通れるくらいの縦穴があった。空洞の奥は暗く深く、どこまで続いているのかは入ってみるまで見当もつかないそうである。

「長老様！ この銅像、思ったより重くて、横にずらすのは無理そうですね！」

ペドロは片手で銅像に杖^{ワンド}を突きつけながら、詰まった声を上げた。見れば、他の魔術を唱えているエルフ達は皆額に汗を滲ませ、苦しげな表情を浮かべている。支えるだけで精一杯といった様子だ。

言葉で単純に浮き上がらせるといっても、実際のところ対象の質量や体積が無視されるわけではない。見えざる手を操るような感覚であるから、当然、効果の及ぶ範囲や効果の程度も術者の技術や魔力量に左右されるわけだ。

魔術と『魔法』は違うのだ。クレミーはシャロンの言っていたセンスの意味が少し理解できたような気がした。

「……仕方がないの。わしらだけで降りるから、お前さん達はわしらが行くまでそれを支えておいてくれ」

「わかりました。どうかお気をつけて」

ペドロは会釈すると、杖を握りなおして術に集中する。

オイゲンは相変わらずマイペースに、穴のあるところまで歩いていく。その後ろをクレミーとシャロンの二人が頭上の銅像にびくびくしながら付いて行く。

縦穴の縁には古びた縄梯子が引っ掛けてあった。オイゲンはちらりと梯子を一瞥すると、

「わしはちよつと腰が痛くなったから、先に行つてくれんかの」

「……それ、本当ですか？」

疑うクレミーの肩を掴んでぐいぐい押し、強引に穴に詰め込む。

「この縄、大丈夫かなあ……」

長い年月を経て耐久力に若干の不安が残るくたびれた縄梯子に、おっかなびつくり片足を掛ける。ちよいちよいと体重をかけて様子を見ながら、もう片方の足を乗せた。

と、その時、鉤爪で地面に固定されていた縄梯子が音もなく根元からぶち切れた。突然、体の支えを失ってふわりと宙に投げ出されたクレミーは慌てて穴の縁を掴もうと手を伸ばすが、わずかに反応が遅れて惜しくも届かなかった。

「あつ、あああああああ！」

暗く狭い縦穴の中を、梯子に足を引っ掛けたままの情けない姿勢で落ちていく。先の見えない恐怖のあまり上げた叫び声が暗闇の奥で反響して返ってきたのを、クレミーは情けなく思った。

＊

「……あれ？」

だが、次の瞬間には既に地に足が付いていた。

遙か地底まで続いていると思われた縦穴は、しかし実は建物一階

分くらいの深さしかなかったらしい。単に中の土が黒っぽいので底が知れなかったただけだったようだ。

クレミーはほっと胸を撫で下ろして、洞窟の中を見回す。

穴を掘って固めただけのそこは意外に広々としていた。特有の土くさが鼻をつき、クレミーはむっと顔をしかめる。

「やれやれ……老体に響くのう」

背後の足音に振り返ると、オイゲンが膝を折って着地の体勢をとっていた。続いてシャロンも上から降りてきた。どうやら縄梯子を使わずに飛び降りたらしい。

「もしかして、先に行かせたのは僕を実験台にするために？ ひどいじゃないですか」

「なあに、拗ねるでない。若いうちの苦労は大切じゃぞ」
「はあ、とクレミーは適当に相槌を打って、

「しかし、よくあの高さから降りられますね。足、大丈夫ですか？」
天窓のごとく頭上にぽっかりと空いた穴から銅像の底が覗いている。

先程、不慮の事故ではあったもののクレミーも同様にあそこから落ちてきた。とはいえ、いざ自分の意思で跳べと言われても、少なからず躊躇いが生じるだろう。それくらいの高低差だ。

そのため、^{いらい}齢数百を迎えた超絶老人が難なくそれを突破できた事実には驚きを隠せなかった。

「お前さんのようにろくに帝都も出たことのないボンボンとは育った環境が違うということじゃよ」

「そんな、僕だって好きで皇子に生まれたわけじゃあ……！」
「つい反抗心が牙を剥くが、オイゲンに当たってもどうしようもないのでやめた。」

と、そこで、わずかに洞穴内に射し込んでいた外の光が消えた。頭上の穴が銅像で塞がれたのだ。

「うわっ、真っ暗」

めったに体験することのない、完全なる暗闇。

クレミーはシャロンのいるだろう方向に視線を向ける。

「昨日の火の魔術でこの暗闇をどうにかできないかな」

「やってみます」

シャロンは人差し指をピンと立てると、腹に力を入れるようにふつと一息吐いた。すると指先に蠟燭サイズの火が灯り、ぼうつと球形に洞穴の中を照らした。そのおかげで、クレミー達のいる入口から奥にかけて、左右に両手を広げたくらいの幅の横穴が続いているのがわかった。

三人はわずかに湿った土の上を奥に向かって踏み歩く。幾らもしないうちに突き当たりが見えてきて、すつと足を止めた。

「あれは……」

先頭に行くシャロンの呟き。何だ何だとクレミーが彼女の肩越しに前を覗くと、黒い大きな棺のようなものがおぼろげに闇に浮かんでいた。重厚な蓋は何やら文字の刻まれた紙の札で嚴重に閉じられ、異様な雰囲気を放っている。

これは、呪文だろうか？ 一体、中には何が……。

「これが財宝かな？」

「……他に見当たりませんし、おそらくそうでしょうね」

クレミーはさつと振り返ってオイゲンに指示を仰いだ。薄ぼんやりとした細長い人影から「開けてみい」と返ってきたのを確認して、棺に手をかける。

蓋にわずかに指先が触れた瞬間、前触れもなく札が燃え上がった。

「熱ちっ！」

ばつと反射的に身を引いたクレミーは驚きのあまり尻餅をついた。紙を火元に揺れる火炎が煌々と暗闇を照らす。

「お札がひとりで……！ おじいさま、これってもしかして！」

「魔術……いや、封印術かの」

腕を組んで静かに見守っていたオイゲンは冷静に分析した。しかしその声には平静を保とうとして無理矢理に焦りを押し殺しているかのような切羽詰まった様子が、シャロンには感じ取れた。

ややあつて紙札が燃え尽き、洞窟の中は元の暗さに戻った。無防備となった棺の蓋が無言で誰かが開けてくれるのを待っているかのような不気味なオーラを醸し出している。

クレミーは少しひりひりする指先に息を吹き掛けながら、棺の中身についての思索を巡らせた。

詳しいことは分らないが、このような攻撃的な魔術で封がされている以上、並みの財宝というわけではなさそうだった。下手をすれば、宝の持ち主（この場合はルンカである）にも危害を及ぼす危険性のある方法を敢えて選んだということは、そこまでして他人の手に渡るのを避けたかった、という主の意思でもある。

それほどの財宝が隠されているというのだろうか。

クレミーは唾を飲み込むと、表面の焦げた棺の蓋を掴み、一気に開いた。今度は触れても何も起こらなかった。ごとり、と鉄球を床に落としたような音を立てて蓋が地面に落下した。

クレミーとシャロンが中を覗こうと我先にと首を伸ばす。刹那、棺の中からすさまじい量の光が放たれ、見えざる力によって二人は派手に吹き飛ばされた。それぞれ反対側の洞窟の土壁に叩きつけられ、地面に崩れ落ちる。

「^{トラップ}罠じゃ！ 気を付けなさい！」

クレミーの耳にオイゲンの鋭い声が飛び込んできた。しかし発光に目をやられて、気を付けようにも何が起きているのかすら把握できない。

とっさに目を閉じたオイゲンは幸いにも視界を奪われずに済んでいた。その視線は次に起こることを見逃すまいと真っ直ぐ棺に注がれている。

すると、オイゲンの言葉を裏付けるように、棺の中からゆらりと何かが起き上がった。五体を有する謎の人形は^{ひとがた}ひどく機械的な動作で棺から這い出ると、腰の辺りから何かを抜き取った。

それは剣だった。錆びて使えなくなつた、^{タガ}短剣。

視界が回復してくると、徐々に人形の^{ひとがた}正体があらわになっていく。

『服を着た骸骨』といえば理解できるだろうか。かなりの時間を経て全身のあらゆる肉を完全に削がれた白骨が、薄汚れたぼろ切れのような衣服を引っ掛けて暗闇に仁王立ちしている。

異様な光景だった。

亡霊？ それにしては実にリアル。

骸骨はさながら牢獄から放たれた死刑囚のように不気味な殺気を纏いながら、ゆっくりと動き出した。

「え……えっ？」

未だに状況に付いていけないクレミーの眼前に、骸骨が迫る。

剥き出しのか細い指先に握られた短剣^{ダガー}が高々と振り上げられるのを、クレミーは夢を見ているような気分で見上げた。風を斬りながら素早くそれが振り下ろされる瞬間、クレミーははっと我に返り、慌てて横に転がった。

苦し紛れの回避は、しかしわずかに間に合わず、肩口に鈍い痛みが走る。斬られた、というよりは荒削りの岩石で殴りつけられたような感触。刃の錆び切った短剣^{ダガー}はもはや刃物としての特長を失い、単なる粗雑でみすばらしい鈍器と化してしまっているようだ。

「くっ！」

膝立ちで起き上がったところに、骸骨の蹴りが飛んでくる。反射的に両腕を交差させてガードしようとすると、突然、骸骨が横合いに吹っ飛んだ。大小様々な白骨がバラバラに地面に散らばり、何事もなかったように沈黙する。着ていたぼろ布がその山の上にぱさりと舞い落ちた。

クレミーはふと足下に転がってきた頭蓋骨に目をやると、そこには木製の矢が一本突き刺さっていた。先端に鏃が見事に骨の壁を打ち抜いている。

矢が飛んできた方向　すなわちシャロンの方を振り返ると、彼女はいつの間に取り出したのか、背中の大弓を骸骨に向けて構えていた。

「シャロン！」

「まだです、クレミーさん！」

キツと睨みつける視線の先。たった今、渾身の一撃によって崩れ去ったはずの骸骨が、

「……は？」

元通りに立ち上がっていた。そして服を失い裸となったことでさらに怪異さを増している。

屍が動き出しただけでも到底信じられない光景だが、そのうえ、それは一度頭をぶち抜いたにもかかわらず再び起き上がってきたという。

一体何がどうなっているんだ。

「まさか……不死身とか、言わないよな」

不死身も何も既に死んでいるはずなんだけど、とクレミーは苦虫を噛み潰しつつ鞘からウオーキングソードを抜いた。

そこで不意に気付く。

「あれは……」

よくよく目を凝らすと、骸骨の全身から赤っぽい蒸気のようなものが吹き出している。

違う。

赤が骸骨を包み込んでいるのだ。それはまるで、一つ一つ独立している骨片をつなぎ止めて、意のままに骸骨を操っているかのような役割を果たしている。赤い波動は不気味に波打ち、禍々しく蠢く正体を見極めんと目を細めるクレミーに向かって、骸骨は勢いよく短剣ダガーを振るった。横風ぎの斬線をクレミーはバックステップで避け、がら空きの肩口に思いきり袈裟切りをお見舞いする。裸の骨は意外に脆く、切っ先は肋の辺りまで届いた。

そのまま倒れるかと思いきや、骸骨は頼りない両足で踏ん張って、それを堪えた。断ち切ったはずの左肩も謎の引力で形を保ったままだ。

「くそっ！」

舌打ちするクレミーに再び凶器が迫る。長剣で払おうと、柄を持

ち上げようとして、しかし抜けない。

とつさに左手のバックラーで受け止めるが、予想以上の衝撃に腕が痺れる。クレミーは痛みに顔を歪めながら、長剣の柄を強く握り締めると、骸骨の脇腹を蹴飛ばして抜き取った。

そして大きく後退して距離をとる。

「大丈夫ですか？ クレミーさん」

慌ててそばに駆け付けたシャロンが心配そうにクレミーの顔を覗き込んだ。彼女のすぐ傍には指先程度の小さな火の玉がふわふわと浮かんでいる。なるほど、遠隔操作も可能らしい。つくづく便利だ。

「はあ、はあ……。まあ、なんとかね」

「そこ、肩から血が……」

言われて見ると、先程骸骨に斬られた、いや擦られた肩の傷から出血していた。

「これくらいなら大丈夫。傷には慣れてるから」

祖父デミトリアスとの稽古ではしょっちゅう擦り傷をこしらえていたものだ。そういう意味での発言だったのだが、何を勘違いしたのか、シャロンは一層心配そうな顔で、むしろ哀れむような視線でクレミーを見つめていた。

「ともかく」

目の前の敵をどうにかしないと、とクレミーは骸骨を睨む。ふつと深呼吸すると、体^{たい}を傾け、盾を持つ左手を前に、剣を握る右手を肩の高さでまで上げる。相手に晒す面をより狭くし、狙いにくくするという目論見を含んでいる。

護身の構え。

斬り殺すよりも、自身を護ることに重きを置いた剣術である。何よりも優先すべきは、自分の命。それがデミトリアスの教えであり、彼から刻み込まれた戦術でもある。

死んではならない。

クレミーの蹴りで倒れていた骸骨が起き上がる。錆びた短剣^{ダガー}が火球の明かりでぎらりと光った。

「待て、クレミー」

「え？」

とんと肩に乗る手。オイゲンはちらりと骸骨に目をやると、クレミーに囁きかけた。

「指輪じゃ」

「……指輪？」

「やつの右手を見てみい。あれが魔力の発生源じゃ」

妖気を漂わせながらゆつくりと歩を進めてくる骸骨。その右手に注目すると、確かに赤い指輪をはめている。さらに観察すると、その指輪を中心に全身を包む得体の知れない霊気は発生していることが分かった。

「じゃあ、あの指輪を壊せば……」

「いや、壊すのは避けたほうがよいじゃろう」

「なぜですか？」

不満げな声を漏らすクレミー。

「あれは呪いの指輪じゃ。元来、呪われた品物アイテムというのは手にした者に強大な力を与える代わりに、もしそれが壊れた時、所有者に相應の不幸をもたらすものでな。ただ、この場合所有者が誰なのかは定かでないが……とにかく、壊してはならぬ」

「そんな……」

本気で殺しにくる相手にそんな手加減が通じるだろうか。

「さて、来るぞ」

「うわっ」

クレミーは意識を目の前の骸骨に向け直した。

骸骨は不自然なほどにひどく人間的な所作で短剣ダガーを振り回してくる。それらを左右の剣と盾で打ち払い、受け流しながら、機会を窺う。

数瞬の攻防。

金属がらんとどうしがぶつかって生じる火花が隠微に骸骨の顔面を照らす。伽藍堂の瞳は暗く影を落として、ただただ空虚な闇を返してくる。

すると骸骨はなかなか決まらない攻撃に業を煮やしたのか、ある時、一撃必殺を狙って短剣を大きく引いた。

これを待っていた。

弾丸のごとく繰り出された高速の正面突きを、クレミーは受けずに体を捻るだけで避けた。貫くべき対象を失って虚しく伸ばされた腕、その先にある白い手首を狙って、思い切り長剣を振り下ろす。嫌な音を立てて手首は切断され、地面に転がった。その途端、骸骨はぎしりと全身を軋ませて、文字通りその場に崩れ落ちた。

再生する気配はない。

「やった……」

クレミーは安堵の息を漏らすと、剣を鞘に収めた。幸いだったのは、敵が獣などの類ではなく人型で武器を扱う者だったということ。でなければデミトリアスに習った剣術も役に立たず、さらに苦戦を強いられていたことだろう。

光を失った指輪を骸骨の指から抜き取り、オイゲンに向き直る。

「なるほどな、あのくそ親父の考えそうなことじゃ」

「えっ？」

「その指輪はルンカの魂を封じた呪いの品物アイテムなのじゃ。そして、これは仮説だが……おそらくルンカはその命が燃え尽きる前にこれまで自分が集めてきた財宝を何者かに引き渡した。そのうえ、殊更に『財宝は森に隠した』とでも吹聴して回り、裏では、棺にこもって自身に封印術を行使して、抜け殻の骸骨をもって財宝を狙ってやって来た賊を迎え撃つ、と。……ふむ、独占欲の強い彼奴きやつならではの遊び心とでもいったところかのう」

オイゲンは嬉しそうに目を細めた。その瞳には無残に崩れて散らばる白骨が映っている。

「あの、長老様。なんというか……申し訳ありませんでした」

「うん？ 何を謝るか」

「長老様のお父上の遺骨を……あんなふうに扱ってしまって……」
蹴り飛ばしたり、切断したり、と常識的に考えたらとんだ背徳者

だ。クレミーはがくりと肩を落とすが、オイゲンはそれでも笑っている。

「気にすることはない。降りかかる火の粉は払わねばならんからの。彼奴もちつとは反省したことじゃろう」

すると、入口の辺りにばあつと光が差した。ペドロ達が再び銅像を持ち上げてくれたのだらう。

「さて、出ることにようかの」

「えっ、でも……ルンカの亡骸は……」

「それもそうじゃのう」

オイゲンはまるで虫をのけるようにしてふわりと手の平を払った。すると、散り散りだった骨片が一箇所に集まり、元の人の形に取り戻してから、棺の中に納まった。

「元よりまともな死に様など期待しちゃおらんだらう。悪党への供養はこれで十分じゃ」

そう言い残してオイゲンは穴のある方へと歩いていく。

杖もなしに魔術を？ とクレミーは初め疑問に思ったが、すぐに思い当たった。オイゲンのはめた指輪である。きっと杖の先に付いている水晶と同じ材質なのだらう。

同様に、ルンカが自身の魂を指輪に封じることができたのにも納得がいった。

三人が穴の下まで来ると、ちょうどよく上から縄梯子が降ってきた。気の利いた誰かがわざわざ代わりの物を取ってきてくれたらしい。感謝しながら、オイゲン、シャロン、クレミーの順で梯子を上る。

穴越しに円い空を眺める。今にも雨が降りそうな、頼りない曇り空だった。

あれ、さっきと何かが違うような。

最後尾のクレミーが登っている途中に、地上から「うひゃあっ！」とシャロンの悲鳴らしき声が聞こえた。心配になって急いで梯子を駆け上がるうとすると、突然、上から何者かによって手首を掴まれ、

一気に引きずり出された。

「あいたた……」

何だよ、もう。

「オイ、動くなよオ」

「……！」

無様に地面にうつ伏せに倒れたクレミィの首筋に、すうっと冷たい金属の感触が走った。

a c t - 0 7 盗賊と共に（前書き）

お待たせしました！

第七話、お楽しみください。

静止は一瞬。

クレミーが反射的に顔を上げようとすると、視界の端にちらりと銀色の刃が映った。

「動くなつてエの。びっくりして斬っちまうから」

男は脅しではなく本気で心配しているようだった。

自分の生き死にを他人に握られる感覚。それはまるで操り人形にでも成り下がったようで、とてもなく気分が悪かった。ある種の嘔吐感ともいえる。迫り上がってくるものを抑えるように、クレミーはぐつと息を飲んだ。

「……どなたですか？」

問うと、男は「さアな」と、即答した。

簡単には名乗らない辺り、案外小物ではないのかもしれない。

「まさか、七年前の犯人……？」

「それよりこっちの質問に答えてくれよな。アンタ、こんな辺境まで来て一体ナニモンだ？　もしかして家出かア？」

「……………あー」

そのうえクレミーの正体は筒抜けらしかった。とんでもなく不利な状況だということは理解できた。

家出、か。

そんな帰ることを前提にした緩い覚悟と一緒ににされるのはかなり心外だったが、それはさておき、情報の伝達があまりに速すぎはしないだろうか。皇城を発ってからまだ三日と経っていないというのに、当たり前のようにクレミーの下に刺客がやって来るとは一体どうなっているのか。

「目的は僕か？」

相変わらず地面を見つめたまま、小声で問い掛けた。

不幸にも、この敵には全くと言っていいほど油断がない。クレミ

「が少しでも動きを見せれば、その都度突き付けられた剣先が反応してわずかな隙すらも与えまいとするのだ。だから先程から敵の顔すら確認できずに無様に地を舐めさせられている。」

「それもある。でもまあ、今は、」

男はクレミーの様子に気を遣いながら慎重に膝を折って、強く握りしめた彼の手の中からルンカの指輪を取り上げた。

「こっちも重要だな」

「どうして指輪のことまで……」

「いや、こればかりは偶然としか言えねえんだな」

男はクレミーの背中から足をどけると、近くで控えていた部下に「テキトーに縛っとけ」と言い残して去って行った。ファルシオンを無造作に仕舞う振り返り様、羽織っているロングコートが翻って風になびいた。

一瞬だけ見えたのは、寧猛な赤い瞳。

はて、盗賊、赤目……聞き覚えがあるような、ないような。

子分と思わしき数人が麻縄で後ろ手に縛り上げていく間、やっと顔を上げることができたクレミーはシャロンとオイゲンの姿を探した。最初に見えたのは、ペドロたち発掘隊が一箇所に集められて数人の賊に囲まれて座らされている光景。それ自体は当然　無論、この異常な事態の中では正常な対応だという意味で　なのだが、しかし気になったのは、その中の誰も魔術を唱えているふうはないという点だ。そして今、クレミーが縛られているのは例の銅像の真下にあたるわけで。

そこでクレミーははっとして頭上を見上げるが、そこには陰鬱な曇り空があるだけだった。

そんな……銅像はどこへ？

なんとなく後ろを振り返ると、穴を隔てた向こう側に巨大な銅像が転がっていた。

確かペドロが横にずらすのは無理だとか言っていた気がするが、結局成功したのだろうか。

「クレミーさん！」

呼ぶ声に視線を戻すと、シャロンとオイゲンが少し遠くに立っていた。すぐそばにはあの赤目の男もいる。特に彼らを拘束している様子がないところからして、大方クレミーという人質をもって抑止力としているのだろう。

赤目が口を開く。

「あの皇子は俺様が貰って行くからな。別れが必要なら今のうちに済ませておけよオ」

赤目の言葉に、オイゲンがぼんと手を打った。

「お思い出した。そういえばクレミーとは帝国の皇子様の名前だったのう」

うわ、またバレた。

それにしても、こんな状況だというのにオイゲンはいやに冷静だった。完全に敵に屈しているのか、それとも単にマイペースなだけなのかは判然としないが、クレミーとしてはちよつと憎らしかった。赤目はそんなクレミーにはあまり興味がない感じで、

「ところでだ。コイツをはめたらどうなる？」

と、ルンカの指輪をオイゲンの前にちらつかせた。

「ふむう。わしも先程見つけたばかりでな、詳しいことは何もわからんのだよ。だがのう、あの悪人の魂を封じたとなれば、あまり縁起の良い品でないのは確かじゃろうよ」

赤目はしばらく手の上で指輪を弄んでいたが、「そうかア」と残念そうに呟いて、ぴんと爪で指輪を弾いた。それは放物線を描いてシャロンの目の前に飛んでいき、そのまま地面に落下しそうになったところを慌てて彼女がキャッチした。

「んな危ねエブツは売り物にもなんねエし、持ってるのも気味悪いから返すぜ。……そういうことだ、じゃアな」

「……あの！」

「ん？」

立ち去ろうとする赤目をシャロンが震える声で引き留めた。

*

車窓を流れていく風景をぼんやりと眺める。見渡す限り草原しかないのどかな街道上を走る電動車のスピードはかなり遅い。例えるなら早歩き程度だろうか。

気がかりだった曇天の空も南に往くにつれてしだいにうららかな晴れ模様へと移り変わり、心地よい春の陽気をたたえている。

「はあー……」

助手席に座るクレミーはそんな穏やかな景観とは対照的に海よりも深い溜め息を吐いた。

エルフの森を発ってから三十分程。後部座席からはシャロンと口の笑い声が絶えず聞こえてきて、自分がどういう状況に置かれているかを忘れそうになる。忘れそうにはなるが、決して忘れることはない。なぜならクレミーが動こうとするたびに拘束用の縄が手足に食い込んできて、嫌でも現実に立ち返らざるを得ないからだ。

「あはははっ！」

何度目か分からないシャロンの笑い声。半簀巻き状態のクレミーには後ろを振り返ることもままならず、彼女たちが一体何の話題で盛り上がっているのかも把握できない。

ちよつと悔しい。それに、

「どうしてシャロンは自由なんだ……？」

僕はぐるぐる巻きののに。

「はあー……」

もう一度嘆息すると、運転席のプチがクレミーの様子に気づいて「おや」と声を上げた。

「悩み事でございますか？ 皇子」

「……僕はもう皇子じゃないですよ、モンティさん。それに、悩みという程のことでもないんですが……これは、一体どうなっているのかと」

「これ、と言うと？」

モンティと呼ばれたことに機嫌を良くするプチ。

「今の状況ですよ」

そう、これはおかしい。

目下、クレミーとシャロンは、団長ロロ・レッドアイ率いる赤目・ギャング盗賊団によって『拉致』されているのだ。なぜか？ それはクレミーがグスタフ・ドイルの血を引いているからに他ならない。盗賊団は本来別の強盗でエルフの森近辺の街に滞在していたのだが、そこで偶然出会った情報屋から『クレミーが城を脱して一人で森にいる』という情報を買取った。そうしてロロ達はクレミーに商品価値を見出だし、旧ルンカ村で難無く彼を誘拐することに成功したというわけである。

そしてあの時。

『……あの！』

『ん？』

『わたしも……わたしも連れて行ってください！』

『……………まア、俺様は別に構わないぜ』

と、こんな具合で、どういうわけかクレミーに付いて行くことを決めてしまったシャロン。彼女は長老オイゲンに『皆さんにはよろしく言うておいてください』とだけ言い残すと、そこで思い出したように村に一度帰り、数分もしないうちに戻ってきた。その手に、クレミーが例の悪ガキ大将パウに奪われた鞆を持って。

『あはは、危うくこれを忘れるところでした。あ、それと、パウ君から伝言です。《アイツにでんごん？ うーん、じゃあ。いきなりおそってわるかったな。ニンゲンにもおまえみたいなやつがいるっ

てわかったよ。いつかおれとしようぶしろよな！……これでいいや。あ、まった、やっぱりさいごのだけで！……だそうです。よかったですね、仲直りできてっ」

『って全部伝えちゃだめでしょ！それに勝負って、彼が大人になる頃には僕は絶対死んでるから！無理だから！』

そしてそのまま口口に強制連行され、現在に至るというわけだ。

「気のせいではないですか。きつと疲れているのでしょうか」

真面目なプチに言われるとそうなのかと思ってしまうそうになるが、しかし流されてはいけない。どんな人格であれ、プチも盗賊団の一味であることには変わらないのだ。

「なんだかなあ……」

盗みの賊というほどであるから、例えば、人殺しを露とも厭わな
いとか、そういった非人道的で残忍なものをクレミーは想像してい
た。

レッド・ギャング

だが、この赤目盗賊団を見る限りでは、そのイメージは必ずしも
当てはまらないようだった。そう、敢えて彼らを例えるなら『肉を
食する修行僧』といったところだろうか。悪イイ奴……というより
は、むしろ、善い自分を嫌い、だからこそ悪を目指す善人とも。

それにしても。

別れ際にペドロが話していたことを思い出す。

『……あの赤目のガキと側近の眼鏡野郎には気をつける。特に眼鏡
は、この俺の背後を易々と取りやがった手練れだ。あいつにはまる
で気配という物が存在しない。さながら静かな湖面をさざ波一つ立
てずに滑り抜けるような、奴自身の存在を微塵も感付かれることの
ない完璧さで相手を殺すことが可能だろう。もう一人、赤目だが……
あいつの剣さばきは特殊だ。何メートルも離れた地点から、あの
重い銅像を丸ごと吹き飛ばしやがった。……まあ、この先どうい
う扱いを受けるかは分らんが、用心は怠るなよ』

そういえば、結局、ペドロさんや長老様とはちゃんとした別れが

できなかったんだよなあ……。

それに、用心っていつても。

クレミーは再度、シャロンの笑い声に耳を傾けた。彼女は飽きもせず口口と何事か話しては、ころころと笑っている。時折、すし詰めになって寝転んでいる盗賊団員のいびきも聞こえてくる。そこに殺伐とした空気は、一切感じられない。

これが人質を積んだ護送車のあるべき姿なのだろうか、とクレミーは人質ながらに呆れ返った。すう、ともはや癖になった溜め息を溜めようとした矢先に、

「おい、皇子」

「うふわあいつ！」

突然、耳元で口口の声が出た。吸っていた息を吐くのと応答が重なり、思わず気持ちの悪い声が出た。口口はしばらく怪訝な顔でクレミーを睨んでいたが、すぐに気を取り直して、

「俺様は決めたぜ」

「な、何を？」

妙に悟りきった感じの口口の言い方にクレミーは些か不安を覚える。

「確かに、最初シャロンちゃんが俺様達に付いてくるって言うてきた時にやア、皇子程ではねエにしてもそれなりに金になるだろうと踏んで、了承してしまったことは認める」

何の話だ？ とクレミーは首を傾げたが、一応、黙って最後まで聞くことにした。

「だが俺様は気付いた。あんな健気で純真で可愛い女の子をどこの馬の骨とも知れねエ貴族どもに売り飛ばそうなんぞ、世紀の大悪党として許されざる行為だったってよオ」

「えっと、つまり？」

全く意図が読めなかったので、やはり早々に結論を求めることにした。

「つまり、シャロンちゃんを俺様によこせてことだ」

どうしてそうなる。

冗談なのか本気なのかはさっぱり分からなかったが、ただ一つ確実なことがある。

「ロロ……っていったかな。君は大きな勘違いをしてるよ」

「ああ？」

「ひっ」

ロロが凄むと、クレミーは蛇に睨まれた蛙のように縮こまった。

一度は殺されかけた相手だ、恐れるなという方が無理というもの。このような身動きもままならない状況では、クレミーの首などいつでも飛んでもおかしくはないのだ。それこそロロの機嫌という不安定な要素に左右されてしまう。他人を介して自分の命を掌握するという奇妙な図がここにできあがってしまったわけだ。

ていうか、目が怖いんだよ、この人……。

クレミーは内心びくつきながら、それでも必死に己を奮い立たせて、震える声で話を続ける。

「そもそもシャロンと僕の間には君が考えているような関係は一切ないよ。なんてったって、つい昨日出会ったばかりだからね」

そして、クレミーが城を出てから一日半しか経っていない。改めて、エルフの村での出来事の濃さを思い知らされる。

「昨日……だとオ？」

「え？」

ロロの表情が見る見る怒りに染まっていく。

うわ、なんで。僕、全然悪いこと言っていないのに。もしかして、消そうにも消せない壮大なトラウマとか忘れ去りたい苦々しい過去とかに無意識のうちに触れちゃったのか。いや、そんな具体的なワードは何も口走っていないだろうし、何よりこの人の場合はそういう怒りではなくて、どちらかというと決闘に負けて相手を憎む騎士のような悔恨の念が混じって……。

やばい、死んだかも。

どうせなら痛みを感じないうちにすばとやっちゃってくれ、と

クレミーは思い切り目を瞑った。

「　　嘘だな」

「……………はい？」

何を言われたのか、すぐには理解できなかった。

「シャロンちゃん程の新鮮天然食べ頃娘が、たった一日でンなオメエみてエな黒々へたれもやしになびくとは思えねエ」

「ああ、嘘ってそういうこと……。にしても、例えば独特だね。ああ、もしかしてお腹減ってるの？」

「まアそんなとこだ。予定外の仕事のせいで食糧が尽きちまってな。街に着いたら、たらふく食ってやるぜ」

ロ口は目を細め、前窓から覗く街の影に思いを馳せた。

やっぱり、こうやって話してみるととても悪賊には思えないな。

同年代ということも相まって、クレミーはロ口に対して少なからず親近感のような感情を抱いていた。同族意識とも言えるかもしれない。いかにも自由主義といった体のロ口に憧れているのかもしれない。なかった。

そんなことを考えていると、

「赤目さん赤目さん」

「ん？　どうしたア？」

シャロンは後ろからひょこつと顔を出すと、街道の向こうを指差した。

「あの街に向かっているのですよねっ。着いたらどうする予定ですか？　やっぱりまずは探検ですか？」

「はア？」

「前におじいさまに聞いたのですけれど、あそこは『布の街ソミエ』といって、服飾業が栄えているそうですね。服屋さんですよ。わたし一度行ってみたいな」

ぽかん、とするロ口を置いて、シャロンはきらきらと目を輝かせながら矢継ぎ早に話を続けた。心なしかその頬はほんのりと朱色に染まっている。

「もしかしてシャロン……わくわくしてる？」

「し、してないですよ。子供じゃないですし」

「でも、僕は帝都を出た時かなりわくわくしてたよ。うん、今もだ」

「そ、そう？ あ、えっと、本当はわたしもわくわくしています」

シャロンは単純な子だった。

「でも……子供じゃない、か。シャロンっていくつ？」

何気なく口にしてから、いつだったかマージョリーに『レディーに年齢を尋ねるのは野暮な男のすることよ』と仕込まれたのを思い出した。

しくじった、とクレミーは顔をしかめるが、当のシャロンは全く気にしている様子もなく、

「うーんと、いくつだったかな。たぶん、今年で二十歳はたちになるくらいだったと思います」

「えっ」

クレミーは思わず絶句した。

「どうかしましたか？ クレミーさん」

「いや、別に……何でもないよ」

年下かと思ってた、とは言えず、適当にお茶を濁した。

「ロロ……は？」

名前を呼ぶことに躊躇を覚えつつも、付けるべき敬称も分からないのでそのまま問い掛けたが、ロロは敏感に察したらしい。

「ロロでいいぜ。今、二十歳だ」

「ってことは、僕が最年少になるのか」

年の上ではそうかもしれないが、精神年齢においてはクレミーは他の二人には決して劣っていないはずだと願いたかった。もちろんこれも黙っていたが。

クレミーはふと窓の外の風景に目をやって、

「それはそうと、この電動車……どうしてこんなにゆっくりとしてるの？」

首だけ動かしてロロを振り返ると、彼はちよつと拗ねたように口

をとがらせて、

「仕方ねエだろ。放電石の残量があとわずかなんだからよ」

「あ、使い捨ての石を使ってるんだ」

「ツたりめエだろ。蓄電石なんざ高くて手が出せねエっての」

「あー、うん。そうかもね……」

皇城育ちで、充電式である蓄電石しか見たことがないクレミーにとっては、使い捨ての方が物珍しいというのが本音だった。だが、皇家や貴族の生まれでもない庶民からすれば、そもそも動力に電気を使うという考え自体が贅沢なのだ。それこそ、明かりには火を、移動には徒歩か馬をと相場が決まっているように。

卑しみなどは抜きで、事実として、クレミーと一般人との間には文化的相違が横たわっている。分かつてはいたつもりだったが、こういった何気ない会話の中で再確認させられたことで、よりクレミーの心に引かれた。

沈思するクレミーに代わって、シャロンがかくんと小首を傾げた。「でも、どうしてわざわざ電動車を……？ 馬車の方が安上がりではないでしょうか」

シャロンが顎に指を当てて、不思議そうに考え込むのを見て、口はここぞとばかりに自慢げに手を広げてみせた。

「常識的に考えればそう思うだろ？ だが違うんだな。俺様達くらの大所帯になると、馬車だとしても二台以上に分けなきゃならねエわけだが、このサイズの電動車なら一台ありゃ全員乗れるんだ。つまり、もし二頭立ての馬車を二台使うとすれば、放電石一個当たり馬四頭の価値があるってことになる。それに、仕事柄、襲うにせよ逃げるにせよ分散するのはあんまり望ましくねエだろ？ その辺りを考慮に入れると、馬より石使った方が断然おトクってわけだ。分かったかい、シャロンちゃん」

なるほどそういうことですか、とシャロンは手を打った。

「つつても費用が掛かるのには変わりねエし、この先団員が増えれば増えるほど負担も大きくなる。……そこで最近、俺様は思っんだ

がよ
」

「若」

半ば遮るような形で運転席のプチが口を挟んできた。その顔はどこか焦りや寂しさのようなものをたたえている。

「……到着でございます」

気が付けば、目と鼻の先に街の外壁があつた。見上げる高さの表門には刺繍を模したポップなロゴで『布の街ソミエへようこそ!』と刻まれており、服飾業を売りにしているというシャロンの話を裏付けていた。

「お、いつの間に。よし、降りるぞおめエら」
「ういーす」

後部座席で雑魚寝している十人弱の団員達に声をかけて、一行は電動車を降りた。

a c t - 0 7 盗賊と共に（後書き）

v 次回も間が空くかと思いますが、末永くお付き合いください（^^）

「わぁ……!!」

「す、すごい……」

シャロンとクレミーは正門をくぐるなり、感嘆の吐息を漏らした。布の街ソミエ。

曲折の多い大通りには所狭しと商店が立ち並び、その間を縫うように設けられた露店では店主が道行く人々に向かって声を張り上げている。人々には肌や目の色の違いこそあれど、「ソミエ」という名の一つの共同体を形成しているという点で一体感を醸している。

古街の趣とでもいふべきものがそこにはあった。

「後は任せたぜ」

ロ口は部下達に荷物下ろしを命じてから、気だるそうにやってきてクレミーの肩を荒々しく掴んだ。

「なアーに見とれてんだ。まさかセントラルバニアから一度も出たことがないワケじゃねエだろうが」

「うーん……。確かにないわけではないんだけど、ただ、あつたのが他国の王に謁見だとか王族どうしで食事会だとかばかりだったから、なんというか……」

目線を街の景観に戻す。

「ほら、帝都って隅から隅まで計算し尽くされた上で建設されているから、全体的にかなり整然としてるでしょ？ だから対称的に、ソミエみたいな雑然とした街並みはとても新鮮なんだよ、僕にとつては」

ロ口は「はあん」と興味があるのかわからないのか分らない相槌を打つと、次はシャロンに話を振った。

「わたしの場合は単に森から出たことがなかったの……というより、出たいと言っても御祖父様がお許しになれなかったのですけれど」

シャロンはぷくつと頬を膨らませたかと思うと、すぐ近くにあった赤レンガの家の外壁をさすりながら首を傾げた。

「ところで、この街の人々はこのような粗悪な家屋で暮らしているのでしょうか。風通しも悪そうですし、何より地面に直に建っている、せつかく蓄えた食糧を魔物達に荒らされてしまします」

「シャロン、それは森での常識でしょ……」

クレミーはやれやれと首を振ると、後ろを振り返った。

「そういえば、ロロ。君達は盗賊団なんだろう？ こんなふうに正面から堂々と街の中に入っちゃって大丈夫なのかい？」

ロロは一瞬何を言っているのか分からないといったふうに眉を寄せたが、すぐに「ああ、そういうことか」と頷いた。

「ヒヤハハ、わかってねエなクレミー。確かに公的には俺様達や悪党だが、ソミエみたいな中小の街の市場経済にとっちゃあ盗賊や海賊なんてのはこの上ない潤滑油なんだぜ」

「え、どういうこと？」

ロロは不敵に口を歪め、大げさに両手を広げて見せた。どうやら彼の癖らしい。

「あるところに果物屋がいたとする。そいつは普段は街に店を構えて果物を売っているんだが、まれに政府が運営する他所行きの貨物用馬車に果物を載せて輸出することがあるんだ。ところがある日、道中で馬車が盗賊に襲われて品物を全て奪われてしまう。当然ながら、果物屋は本来得るはずだった収入を失い、それについて政府を問責するだろう。警備に不足があった責任のある政府は反論できず、仕方なく賠償金を払うことになるわけだ」

「じゃあつまり、市場には影響がないから問題ないってこと？」

「影響がないだけなら悪は容認されねエよ。実際、市場以外の方面では相当な損害出しているからなア」

「……なら、どこが潤滑油なんだよ？」

「十分な利益になるのさ。じゃあ聞くが、政府の賠償金ってエのはいくらだと思う？」

「うーん、妥当なところで言えば、それまでの品物の売れ行きを平均化した金額じゃないかな」

クレミーはちらりとロロの反応を窺ったが、対してロロは「チツチツ」と愉しげに指を振った。

「平均？ いいや、全額なんだな。すなわち、全ての商品を政府が買い取ったことにしちまうんだよ」

「……なるほど、それは確かに利益になるね」

政府にとっては大損害だけど、と付け加える。

「……つつてもこりやア割とマイナーな方の理由で、実際は、盗賊なんかはいい顧客になるからってのがデカイかもな。大所帯で泊まれば宿屋が、備蓄食糧の大量買い込みで食料品店が、武器の調達やら修理やらで鍛冶屋が……なんて具合で市場全体が儲かる仕組みになつてゐるわけだ」

ロロはご満悦な様子で解説をしながら、市街地に足を踏み入れていく。クレミーもそれに続き、二人の話に入れないシャロンは道端の露店で売られている武道具を物珍しげに眺めながら、一歩後ろを付いていった。

「おっす」

ふと思いついたように、ロロがすれ違う人々に片手を上げて挨拶をした。彼らはロロの姿を認めると、すぐさま微笑み交じりに会釈を返していった。

「今の知り合い？」

「いや、俺様は知らねエ。すげエだろ」

「……有名なんだね」

「ヒヤハハ！ どいつもこいつも俺様に恐れおののいてやがるのさ！」

通りを進むこと数分、ゆるやかなカーブを描く道の先に大きな宿屋が見えてきた。どうやらロロはあてもなく散策していたというわけではなく、そこを目指していたらしい。

目的地が分かって少し安心すると、クレミーは先ほど感じた疑問

を口にする。

「それにしても……変じゃないか？」

「ん？」

「いや、さっきの話の続きなんだけど」

クレミーが前置きすると、口口は顎で続きを促した。

「確か、政府が賠償金を払うって言ったよね？」

「あア、馬車を出しているのは政府だからな。その代わりにヤツらは輸出入に関税を掛けて、それを歳入としている」

だったら、とクレミーは口を尖らせた。

「なおさらだよ。政府は慈善でやってるわけじゃないんだろ？ 賠償金なんかできれば払いたくない。じゃあどうして、こんなふうに我が物顔で街の大通りを歩いている盗賊を捕まえないんだろ、って」

「あー、おまえさんは帝国の皇子だからわかんねエか。簡単に言えば、金がないんだよ」

「金がない？」

聞き慣れないワードにクレミーは思わず聞き返した。

「中小街のさだめってやつだアな。政府が直々に兵力を持てるほど資金が余ってないんだ。そうだな、よくてボランティアで自警団を結成しているところがあるくらいか。こりゃア、大体どこの街でも一緒だぜ」

「それじゃあ、ソミエみたいな街は盗賊に対して抵抗ができないってこと？」

「いや、その代わりに専門の取り締まり屋がいてだな……っと、噂をすれば」

「え、何が？」

宿屋はもう目と鼻の先というところで、口口は不自然に足を止めた。

「わりい、クレミー」

口口はクレミーの胸に両手を重ねて添えると、ふっと息を入れた。

「うわっ！」

次の瞬間、突風に吹かれたかのようにクレミーの身体が宙を舞った。「く」の字の姿勢のまま行き交う人々の頭を悠々と飛び越えて、その先のレストランのテラスまで飛ばされる。そのままカッパルの団欒するテーブルに派手に突っ込んだ。

「のわあっ！ 痛たたた！」

運悪くテーブルの角に尻を強かに打って、クレミーは痛みのおまじ、机と椅子の散乱する床をごろごろと転げ回った。カッパルや他の客達は何事かと目を瞬かせ、しげしげとクレミーを眺めた。

「すみません、すみませんっ」

それらに平謝りして回りながら、実行犯である口口のいる方向を睨もつとした。

が、そのとき。

キーン、と金属と金属を擦り合わせたような耳をつんざく電子音が辺りに鳴り響き、クレミーは反射的に耳を塞いだ。しばらくして残響が消えると、待っていたかのように拡声器越しの大音声が響き渡った。

「……あーあー。こほん！ ソミエの市民のみなさま、お騒がせして申し訳ございません！ こちら大陸生活安全管理局治安維持課所属広域保安官、ミスティ・ミルキーでございます！」

肩書き長いな！ とクレミーは心の中で突っ込みつつ、声の主を探す。

「慌てず落ち着いてお聞き下さい！ ただ今、ソミエ一番大通り、

宿泊処《憩い屋》旅館前にて、指定盗賊団、レッド・ギャング赤目盗賊団の一員の姿

を確認いたしました！ これより検挙行動を開始いたしますので、

市民のみなさまはただちに安全な場所への避難をお願いいたします

！」

「おいこら小娘エ！ 俺様は一員じゃなくて団長だア！」

人込みの向こうから口口の怒鳴り声がして、大衆がどわっと沸いた。人々は皆、「やれやれまたか」「今度こそ捕まるんじゃないか」

と口々に二人の掛け合いを揶揄しながら、至極面倒そうに、それ
いてどこか楽しげにこの場から立ち退いていった。

クレミーは背伸びをして、洪水のように溢れかえった人々の中
からなんとか口口の姿を確認する。次いでその目線の先、「憩い屋」
の屋根の上に、メガフォンを持った少女が仁王立ちしているのも発
見した。

肩まである髪をきれいに頭の上で団子状に結び上げ、動きやすそ
うな保安官の制服に身を包んだ彼女は、市民がのろのろと撤退して
いくのを不満そうに見送ってから、口を開いた。

「また会ったわね、赤目」

静寂が支配する大通りに、ミスティの不敵な声が響く。

口口は呆れ交じりに両手を広げた。

「そりや会っただろうよオ。おめエが俺様を追っかけてきてんだから
するとミスティは顔を真っ赤にして、

「こ、これは偶然よ！ どうしてあたしがアンタらみたいな小物を
追わなくちゃいけないのよ！」

「小物だつてンなら是非とも見逃してくれ」

「それは無理な相談ね。たとえ小物でも点数のためなら……」

喋りながらミスティはプロテクターの付いた革製のグローブを両
手にはめて、屋根の端に足を掛けた。ぐっと足を曲げた姿勢で一度
口口を見据える。

「潰すのみよ！」

次の瞬間にはそこに彼女の姿はなかった。足場になっていた屋根の
瓦が飛び散り、軒下に落下していく。弾丸のごとく飛び出したミス
ティは瓦礫が地面に着くよりも先に口口の目の前に着地し、間髪入
れず足払いを掛けた。

「いてエ！」

剣を抜こうと柄に手を掛けていた口口は完全に虚を突かれ、体勢
を崩した。そこを狙って、すかさずミスティから高速ソバットが放
たれる。

「ンなるっ！」

ロロはファルシオンの刀身でそれを防御した。刃がわずかにしなり、彼の両手に痺れが走る。

「チィッ」

ロロは舌打ちすると、蹴られた勢いのまま転がり、一度ミスティと距離を取った。

「危ねエな！ いきなり何すんだ！」

「ていやっ！」

ロロの抗議には答えずに、ミスティは思い切り地面を踏みつけた。すると突如足場のタイルが爆ぜ、爆発はそのまま生き物のようにロロの足下へと連鎖していく。

「無視かよオ！」

それをひよいと横っ飛びに避けたロロは、反撃とばかりに身を低くしてミスティの懐へと飛び込んだ。

至近距離で真横から斬りつけられるファルシオン。しかしミスティは慌てずに両手を地に付けると、逆立ちの姿勢から足を開き、大きく回転させて、ロロの剣を持つ左手に蹴りを当てた。

「ぐあア！」

衝撃に左手が弾かれ、肩の関節が悲鳴を上げる。かろうじて剣は手放さなかったが、完全に無防備になったロロの顔面へ、もう片方の足が襲いかかる。反射的にロロは背をのけぞらせ、直撃を避けたが、凶器と化した革靴の先端がわずかに鼻先をかすめ、鮮血が舞った。

「惜しい！」

ミスティの悔しがる声とともに、破砕した瓦礫の上に赤い斑点が飛び散った。

そのとき。

「ううっ……」

血飛沫がロロの視界に入った途端、彼の顔付きが変わった。

「が、ア……！」

彼の特徴である赤い瞳は肥大化し、白目を覆い尽くした。腕や顔にはドクドクと脈打つ太い血管がありありと浮かび上がり、大きく開かれた口元からは鋭利極まりない牙のような八重歯が覗いている。それはまさに、獣特有の獰猛さと悪魔のような残酷さを併せ持った「人外」の者に他ならなかった。

「なによ、こわい顔しちゃって……」

謎の豹変に、ミスティは焦りを隠せなかった。

口口は赤しくない瞳でぎろりとミスティを睨んだ。

「きゃっ」

すると突然、ミスティの全身に怖気が走り、彼女は思わず尻餅をついてしまった。

その隙を逃さず、口口は数歩の距離にいるミスティに向かって、剣で薙いだ。虚空を斬った剣線は、しかし衝撃波となって彼女の首を狙う。

まずい！ ミスティはすぐさま我に返ると、かろうじてそれをかわした。ところが、続けざまに放たれた二撃目、三撃目によって彼女は徐々に追い詰められていく。

このままではやられる、とミスティが立ち上がりかけた時、口口は既に目の前におり、彼女の首筋を掴んでいた。

「か……はっ！」

そのまま強引に持ち上げられ、自分自身の体重でぎゅうつと首が絞まる。

口口は感情のない瞳をミスティに向けると、首を掴んでいる右手をやや顎の方向へとずらし、左手のファルシオンをゆっくりと持ち上げた。

断頭。

ミスティは酸欠の頭ながらもこれから起こり得る惨劇を想像して、目にうつすらと涙が浮かんだ。

うそ、でしょ？ あたし、こんなところで……。

死への恐怖がミスティを縛り付ける。抵抗しようと思えばできる

はずなのに、体から勝手に力が抜けてしまつて、言うことを聞いてくれなかった。

「くう……」

ロ口はわずかに苦しげな呻き声を漏らしたが、ぎゅっと柄を握り直すと、迷わず剣を振るつた。

ところが。

あと少しで刃先が皮膚に到達するところで、その隙間に何かが差し込まれた。キン！ という甲高い音とともに、ファルシオンが弾かれる。

「セーフ……」

半ば体を挟み込むような形でバックラーで受け止めたクレミーは安堵の息をつくと、なおも攻撃を続けようとするロ口の腹部に鞘を突き刺した。

「うぷっ」

ロ口は空気を吐き出し、つらそうにへその辺りを押さえながら後ろに倒れ込んだ。それによってミスティも地面に降ろされる。

「今のうちに逃げるよ！」

クレミーは憔悴しきっているミスティの手をとると、本来の目的地であつた憩い屋へと駆け出した。玄関口で女将に適当な理由をつけ、最寄りの部屋に飛び込むと、急いで扉の鍵を閉めた。

「よし……追つてきては……いないみたいだ」

外の様子を窺いながら、ミスティを手近な椅子に腰掛けさせる。

「こほ、こほっ……」

「大丈夫？ ……つて、そんなわけないか。もし本当に苦しかったら、病院まで送っていくから言つてね」

「え、あの……」

ミスティは突然の事態に戸惑つていた。

先程は確かに己の最期を悟つたというのに、しかし彼女はこうして何事もなく生きている。荒い呼吸をしている。一瞬、全てが白昼夢だったのかとも考えたが、この首の痛みは本物だった。

ミスティは無意識に首もとをさすっていたらしく、それに気が付いたクレミーが心配そうな声を上げる。

「首、やっぱり痛むかな。痣とかにはなっていないみたいけど」

「あ……そう、なの……」

なぜだかは分からなかったが、ミスティはクレミーの顔を直視できずにいた。記憶は定かではないが、おそらくこの黒髪の男に助けられたらしいことは薄々理解していた。

どうしよう、お礼とか言わなきゃだめよね。

「あの……」

「え？」

「名前……は？」

ぼそぼそと喋るミスティにクレミーは首を傾げたが、特に気を悪くした様子もなかった。

「僕はクレミー・ミルフォード。一応、冒険者かな」

「へえ、クレミーっていうんだ……ふうん……」

ミスティは足下を見つめたまま、小声で呟いた。

「って、ちよつと！？　なんであたし、命の恩人に対してこんな態度しかできないの！？　超失礼っ！」

「君は、えつと、ミルキー・ミスティさん？」

「ミスティ・ミルキーよ！」

「うわっ」

今まで意気消沈としていたミスティがいきなり大声を出したので、クレミーは驚いて数歩たじろいだ。

「ごめん……ミスティさん」

「あつ……！　その、別に、あたしのことはミスティでいい、わよ、です……はい……」

口ごもるミスティに、クレミーは微妙に首を傾げたが、すぐに気を取り直して、

「ちよつとじつとしててね」

背負っていた鞆から何かを取り出して、ミスティの足下にしゃが

みこんだ。その手が彼女のふくらはぎに触れた瞬間、

「きゃあっ！」

「がっ」

ミスティはクレミーの胸元を思い切り蹴り飛ばした。壁に頭を強打したクレミーの視界に星が散る。

「痛い……っ……」

「えっ！？ あ、その、今は……！」

見れば、クレミーが手にしていたのは消毒液と包帯だった。

ミスティは慌ててハーフパンツから覗く自分の足を確認すると、くるぶしに近い辺りからわずかに出血していた。赤目の攻撃は全部避けたと思っていたが、どうやら衝撃波の攻撃がわずかにかすっていたらしい。そして、クレミーはその手当をしてくれようとしたのだと、ミスティは今更ながらに気が付いた。

数々の失態に、ミスティは居たたまれなくなる。

「本当にごめんなさい！ あたし、さっきから失礼なことばかりして……。も、もう行くわねっ！」

言うが早いかベッドから立ち上がり、戸口へと駆け出すミスティ。

しかしクレミーは急いでその前に回り込み、彼女を止めた。

「外は危ないよ。ロロがまだ君を狙っているかもしれない」

「あっ……」

徐々に先程の記憶が蘇ってくる。人間らしさの欠片もないあの赤い瞳と、不気味に煌めくファルシオン……。

すると、ミスティはへなへなと膝から床に崩れ落ちそうになる。

すんでのところでクレミーが体を支え、何とか姿勢を立て直す。

「君はしばらく休んでいた方がいいよ。ロロのことは……僕に任せ
て」

クレミーはミスティに笑いかけると、部屋を出てロロの下へと向かった。その背中を、ミスティは期待と心配の入り交じった目で見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9067q/>

放浪のプリンス

2011年7月22日03時36分発行